

各個教会史誌から見えてくる 戦時期台湾のキリスト教徒⁽¹⁾

高井ヘラー由紀

研究の動機・目的・方法

筆者はここ二年ほど富坂キリスト教センターの研究プロジェクト「戦中・戦後の日本の教会——戦争協力と抵抗の内面史を探る」を通して、戦時期の台湾キリスト教徒についての検討を深めてきた。「内面史研究」とは、いわゆる「協力」や「抵抗」の二項関係だけでは把握しきれない戦時期キリスト教徒の歴史経験をより深く理解しようとする試みである。

しかし台湾の場合には、戦時期キリスト教徒の「内面」を探る以前の問題として、「協力」か「抵抗」か、という問いそのものが日本内地や朝鮮半島の場合のように必ずしも有効ではない⁽²⁾。元来、台湾という場所は17世紀以来、外来政権による統治を受け続け、人口の多数を占めるようになった漢族系住民もまた原住民族を圧迫して台湾に居住するようになった移民であった。また漢族系移民にも閩南語を話す福佬人^{ホクロー}と客家人と^{ハッカ}がおり、それぞれの内に異なる権益を求める諸集団が存在していた。

確かに、日本統治期に「抗日」意識を軸とする「台湾人」意識が形成されたとの指摘はある。しかし、それは日本の軍国主義体制に対して台湾人が揃って「抵抗」（あるいはその裏返しとして「協力」）するような

一元的なものではなかった。むしろ、戦争を経験した直後に国民党による台湾住民虐殺や白色テロを経験したことにより、戦前から台湾に居住していた漢族系住民の間では、国民党に対する抵抗の意識を共通基盤とする「台湾人」意識が形成されたのである。

国民党による圧政が、戦前の日本統治や軍国主義の経験を比較的「ましだった」と記憶させ、「協力」や「抵抗」の文脈において記憶し続ける契機を弱めたことは事実であろう。戦後30年以上にわたって言論の自由が極端に制限され、適当な時期に戦時期に関する記憶を掘り起こし、記録し、批判的に検証する作業ができなかったことも、戦時期の記憶が曖昧であったり、批判的考察が少ない原因だと思われる。

その結果、台湾人の戦争経験そのものに着目した研究の蓄積は極めて少なく、記憶を掘り起こす作業も中国大陆や南洋に動員された台湾の人々一軍属、義勇軍、少年工、看護婦、慰安婦、俘虜収容所監視員など一に関するものが主である⁽³⁾。台湾にとどまっていた人々が経験した戦争体験を特化して探った研究となると、管見の限りほとんど存在しない⁽⁴⁾。

そのような歴史叙述の傾向に対して、キリスト教徒やキリスト教会の戦時期の経験に関しては一定の叙述が存在してきた。『台湾基督長老教会百年史』（1965年、以下『百年史』）第二編第七章には戦時期に台湾長老教会の伝道者および長老・信徒が経験した事柄が非常に的確に叙述されている。近年の研究でも査析『旭日旗下の十字架：1930年代以降日本軍国主義興起下の台湾基督長老教會學校（旭日旗の下の十字架：1930年代以降の日本軍国主義と台湾長老教会ミッションスクール）』（稻郷出版社、2007年）、盧啟明『傳道報國：日治末期台灣基督徒的身份認同（1937-1945）』（秀威資訊、2017年）がある。特に後者の研究は、戦時期の台湾長老教会に関する総合的な研究ともいえ、これまでになかった台湾人キリスト教徒の「報国」意識に着目している点でも、新し

い見地を切り開くものである。

これらの叙述のうち、『百年史』は実際に戦時期を通った教会指導者によって執筆されていることから、その視点は長老教会組織と日本軍国主義の衝突、日本人教会との微妙にして不幸な関係に焦点が当てられている。一方、これらの教会関係者より二世以上も離れている査析および盧啟明によるには、主に『百年史』および関係者（主に伝道者）による回想資料、また台湾長老教会の『教会公報』記事に基づいた記述である。回想資料および『教会公報』記事は共に有効な一次資料ではあるが、台湾キリスト教徒や教会の戦争体験を総合的に捉えるためには不十分である。

これまでの戦時期キリスト教に関する研究は、台湾に限らず信仰的・神学的・知的・思想的問題に関するものがほとんどであった。そのような問題意識は確かに重要であるが、戦争という事態では日常生活のありとあらゆる方面における約束事が根底から覆される。命を軽視する価値観が強制され、その文脈の中で人間の知性や精神、信仰も圧迫される。しかし、「日常」の視点からキリスト教徒や教会の戦争経験に関心をもって迫った研究は極めて少ない。このような問題意識に基づき、本稿では、終戦以前の台湾に存在していた教会やキリスト教徒が、戦時期を通じて実際に何を経験したのかをできるだけ日常的な視点から示すことを試みる。その方法として、第一に、台湾において各個教会が節目の年に発行する教会史誌（中文では「紀念特刊」「紀念冊」などと表記）に着目し、可能な限り記念誌を網羅的に調査した上で、戦争体験に関する叙述のデータを翻訳したものを一覧にして示した（資料1）。また、一覧表に収めるには長文すぎる資料は翻訳して別の資料としてまとめた（資料2）。その上で、これらの資料から戦時期の台湾においてキリスト教徒がどのような経験をしたのかについて分析を加えてみたい。

資料としての各個教会史誌

ここで、基礎的データを収集するにあたって筆者が参考にした教会史誌とはどのような性格の資料であるかを、若干整理しておきたい。教会史誌とは、各個教会が数十年などの節目の年に記念事業を行うにあたって、歴史を振り返り、慶祝の辞、歴代伝道者一覧、歴代長老執事一覧、回顧、簡史、詳細な歴史、写真、團契（教会内の「各会」）、日曜学校、分教会の紹介、幼稚園の歴史、証しなどを集めて本の形にしたものである。かつては簡素で文字中心のソフトカバーの冊子が多かったが、近年は分厚くハードカバーで写真中心のものが多い(写真1参照)。また一般的に、歴史が長く重要視されている教会であればあるほど、教会史誌は分厚く豪華になる傾向がある。基本的に非売品であるため、書店などで買い求めることはできない。

この教会史誌を資料として用いる第一の理由は、教会訪問をせずに台湾全島の各個教会の戦時中の一般的状況を横断的に調べることができるためである。第二の理由は、教会史誌にはしばしば関係者の戦時期に関する回想の文章が含まれているためである。確かに台湾長老教会発行の機関誌『教会公報』は戦時期にも発行されていたが、戦時期に関わらず植民地台湾における印刷物は厳しい言論統制下にあったため、戦時期の実際の様子を印刷物から推測することは容易ではない。その点、未だ戦争経験者が健在だった戦後の比較的早い時期に発行された教会史誌に掲載された経験者による回想の中には、貴重な一次資料としての価値を有する文章が多い。さらに、これは必ずしも戦争とは関わりのないことであるが、特に近年では長老教会の中でも歴史資料の価値が認知されつつあるため、各個教会が保管している一次資料を教会史誌の中でも写真で紹介しているケースが見受けられるようになってきた(写真2参照)。

それぞれの教会が保有する歴史資料への評価は、それぞれの教会が歴史と向き合う姿勢の真摯さと比例している⁽⁵⁾。

一方、教会史誌調査には限界もある。まず、それぞれの教会の信仰的傾向や教会員の教育程度、歴史的センスなどによって内容が大きく異なる。伝道者や長老執事あるいは信徒の中に歴史に対する造詣の深い人物がいた場合には、歴史記述のクオリティも当然高いものとなる。しかし教会史誌は必ずしも「年史」という位置付けではないので、歴史を追求する意図がまったく感じられないものも多数存在する。さらに、教会史誌は学術誌ではないので、歴史記述はクオリティの善し悪しに関わらず正確さや厳密さを必ずしも追求していない。また、特に戦時期に関する歴史資料は欠如していてよくわからないことが多いため、その部分の記述を『百年史』などの既存の叙述に頼って、単に流用しただけのものもある。したがって、教会史誌の歴史記述は間違いや思い込み、他の文献からの流用などのファクターが含まれていることが多いという前提で扱われなくてはならない。

各個教会史誌調査の概要

教会史誌を本格的に調査するにあたり、筆者がとった手法は以下の通りである。まず、終戦以前に存在した台湾基督長老教会（以下、PCT）の各個教会を把握するため、PCT ウェブサイト (<http://www.pct.org.tw>) より得られる情報から、終戦以前に設立された教会を絞り込んで一覧を作成した。そしてウェブサイトから得られる各教会の沿革を確認、戦時期（1931-1945）への言及があるものに関しては一覧にその記述を含めた。その上で、台湾神学院資料中心、長栄高等学校校史館、台南神学院図書館に所蔵されている教会史誌約 200 冊に目を通した。しかし時間的制約により、南部の教会を中心に 20～30 冊ほど目を通

すことができなかつた教会史誌がある。したがって、この一覧は中間報告的なデータとして扱われるべきである。教会史誌を最も網羅的に収集し保管しているのは台湾神学院資料中心であるが、大抵の場合、一教会で何冊も教会史誌を出しているため、同資料中心もすべての教会史誌を保有しているわけではない。現存する教会史誌すべてを網羅するリストは管見の限りでは存在しない。ただし台湾教会史資料に関するもっとも充実したアーカイブスである「頼永祥長老史料庫 (Elder John Lai's Archives)」(<http://www.laijohn.com>)には「PCT 地方教會總檔 [台湾基督長老教会地方教会総覧]」のページがある (<http://www.laijohn.com/PCT-W/PCT-W%20contents.htm#>)。ここには頼永祥個人が保有する各個教会史誌およびその他の資料に掲載された各個教会史の叙述合計 400 ほどが一覧表にまとめられ、それぞれの叙述を閲覧することができる。また、台湾長老教会では各個教会だけでなく各中会でも記念史誌を出版している。今回の調査では、教会史誌を参照できなかった教会群の様子を知るために中会史誌も参考にした。

こうして筆者が作成した戦時期の台湾長老教会一覧の統計では、戦時期にあった教会数は全島で約 195、うち南部が 127、北部が 68 であった。現在の中会の分け方でいうと北部は七星中会 18、台北中会 20、新竹中会 21、東部は東部中会 9、中部は台中中会 18、彰化中会 16、嘉義中会 28、南部は台南中会 27、高雄中会 19、壽山中会 5、屏東中会 14、となる⁽⁶⁾。

なお、本稿では台湾長老教会のみに焦点を当てているが、戦前を通じて台湾に存在したその他のプロテスタント教会は、日本教会（日本基督教会、日本組合基督教会、日本聖公会、日本メソジスト教会、日本ホーリネス教会、日本救世軍）および中国大陸起源の真耶蘇教会に限られていた。うち台湾人が集っていた日本ホーリネス教会および真耶蘇教会は 1920 年代半ば以降に台湾で活動を開始した教会であり、戦時期には長

老教会と比較すると未だ弱小で社会的影響力も少ない教会であったため、ここでは検討の対象から外している。

各個教会史誌に見られる歴史叙述の特色(1)一般的特色

戦時期の台湾キリスト教徒や教会に関する教会史誌の記述を分析する前に、まず教会史誌に見られる歴史叙述の特色をざっと確認しておきたい。

教会史誌を横断的に見ることによって第一に浮かび上がって来る台湾教会の特色は、初期に台湾で建てられた教会の大半が平埔族^{へいほ}の教会であるということである。平埔族とは、16世紀以降に対岸福建省から渡ってきた漢族移民との接触・衝突を繰り返すうちに漢化されて、原住民族としてのアイデンティティの大半を失ってしまった平地原住民族のことを指す。19世紀後半に台湾南部にイングランド長老教会宣教師であるマックスウェル、リッチー、バークレイ、キャンベルなどが、また北部にカナダ長老教会のマックイが入って宣教した時代には、平埔族は既にほとんど母語を話せなくなってはいたものの、部落によっては漢族とかなり異なる文化的アイデンティティを未だ保っていた。平埔族系教会の教会史誌の中には、自教会の歴史を台湾における平埔族の歴史の起源にまで遡って記述してあるものも少なくない。

このような教会の人々にとって、歴史の追求において何よりも重要なのは平埔族である自分たちのアイデンティティのルーツを探ることであり、それは日本統治末期の戦争経験よりも重要な意味を持っていると考えられる。

宣教初期の教会のほとんどが平埔族教会であったということにも関連するが、北部では初期に建てられた教会の大半は宣教師ジョージ・マックイの開拓伝道によって建てられたものであり、多くの教会史誌が歴史

叙述においてマッカーイによる宣教活動の解明に力を注いでいる。しかし、マッカーイによって建てられたとされる平埔族教会の多くはマッカーイ死後に活動が低迷、その後日本統治期を通して低迷あるいは集会休止の状態が続き、戦後に PCT 伝道局が組織的にテコ入れしたことで再び教会として軌道に乗ったものが少なくない。これは南部の平埔族教会にもある程度共通するパターンである。これらの教会の歴史叙述の特徴としては、宣教師による伝道→教会設立→日本統治期初期当たりまでの展開を記した後、戦時期を一気に飛ばして 1950 年代以降の歩みを記すというものである。

一方、宣教中期（1880 年代以降）に建てられた教会の大半は、それまでに建てられた教会の枝教会（支会）である。その枝教会からまた教会が生まれる、といったように、ほとんどすべての教会が別の教会と家系図的つながりを有している。実際、多くの教会史誌において自分の教会から派生した教会群の「家系図」ならぬ「教会系図」が記載されているのは、台湾教会の文化的特色の一つといえる（写真 3 参照）。

各個教会史誌に見られる歴史叙述の特色(2) 戦時期に関する叙述の傾向

次に、教会史誌における戦時期に関する叙述の全般的特色を見ておきたい。大まかな傾向として、戦時期の経験は決して積極的に叙述されていない。戦時期への言及があったとしても、上述のように『百年史』に代表される既存の叙述を引っぱってきただけの、実際の経験や聞き書きではない叙述も多く含まれている。特に平埔族系の教会の場合、この時期に低迷していたものが多かったためか、全般的に戦時期への言及が少ない。また台北中会および七星中会の教会も戦時期に言及しない傾向が見られるが、これは 1960～1970 年代に台北中会および七星中会が体

制（国民党政権）に順応する傾向があったことに関連するのではないかと考えられる。

一方、中部や南部の教会史誌には、戦時期の経験に言及しようとする姿勢が比較的に見受けられる。特に1960～1970年代の教会史誌においては、一次資料としての価値を見出すことのできる戦争経験者の回顧が比較的多く含まれている。このように南北の教会で戦時期への言及の頻度が異なることは、戦後に北部と中南部とで体制に対する温度差があったことに起因するのか、それとも戦時期に北部と中南部とでは当局のキリスト教に対する扱いに違いがあったのかは明らかではなく、この点については今後続けて検討していきたい。

また、原住民教会の教会史誌は本稿で扱った調査の対象外であるが、PCT ウェブサイトに記載されている沿革史を見る限りにおいて、多くの部落で1930年代から伝道の働きがあり、それを自教会の歴史に含めている教会が20ほどある。これらの教会の沿革史にはいずれも例外なく警察の執拗な迫害が記録されており、日本統治当局者によるキリスト教徒迫害が原住民教会史の起点にあることを明確に知ることができる。

各個教会史誌のデータから明らかになったいくつかの点

以下、「資料1」に示されているデータから明らかになった、戦時期の台湾キリスト教徒の現状について分析していきたい。

第一に、戦時期にキリスト教徒が直面した諸問題は神社参拝や皇民化運動の影響などによる精神的なものだけではなく、はるかに多岐にわたるものであった。全体的な傾向として、台湾教会では1920年代より教会の自治独立に対する気運が高まっていたことを反映して、1930年代前半から半ばまでに多くの教会が自治独立を果たし、会堂建築を実現させている。台湾中部では中部大地震（1935年4月21日）で多くの教会

が被災したため、復旧の意味もあって会堂建築が奨励された。1936年には中国より宋尚節博士が来台してリバイバル伝道を展開し、台湾教会の教勢拡大につながる大きな盛り上がりをもたらした。それが1937年の七七事変以降頭打ちとなり、とりわけ1941年以降になって教会の活動や礼拝が次第に継続できなくなっていったという大きな流れがあったことが、教会史誌の多くの記述から読み取れる。

戦争による影響はあらゆる側面に及んだが、教会関係者が最も心を痛めたのは、礼拝堂や牧師館などの教会建物が軍部によって占拠されたり空襲によって損壊し、教会の礼拝や諸活動が継続できなくなったことであった。教会建物は占拠されなくとも、門や鐘などの金属類を抛出させられた(資料2④⑩)。軍部に占拠された教会は非常に多かったが、すべての教会がそうだったわけではなく、終戦まで占拠されなかった教会もあった(資料2⑥)。どのような基準で教会は占拠されたりされなかったりしたのか、これも今後の調査課題である。

空襲は特に都市部の教会では非常に大きなインパクトを持っていたことが、教会史誌の叙述から明らかに窺える。ほとんどの都市部の教会で、空襲→疎開→礼拝出席人数激減→礼拝停止、というパターンが見られた。これらのファクターに加えて、戦時動員(志願兵・徴兵、学徒動員、奉公活動など)による礼拝出席人数減少も、教会に大きな痛手を与えた。青年や壮年の男性が多く動員され、礼拝出席者は女性・児童・年配者になっていった。空襲が激しくなってほとんどの住民が田舎に疎開、少数で礼拝を守り抜こうとするも、都市部の教会はほとんど礼拝停止、教会の一時閉鎖を余儀なくされたようだ。

戦時期にはほとんどの教会で教勢が極端に落ち込む中、戦時期に支会(自給独立していない教会)から堂会(自給独立教会)に昇格した教会、物資が少なくなっていたはずの戦時期に会堂建築を果たした教会、1945年まで成人会員の受け入れをしていた芳苑教会のようなどころも

ある（資料1の6_16参照）。

しかし、戦時中はどこも食料不足、物資不足であり、特に伝道者の家族はさまざまな方法で生活をしのぐ日々が続いた（資料2③⑤⑥⑩⑪）。伝道者や教会信徒にとっても空襲は恐ろしく、死と隣り合わせの中での教会活動、牧会活動であった（資料2⑤⑥⑦⑩）。ただし、教会員が空襲の犠牲になったという記述はほとんどない（例外：資料2⑤）。また教会は米軍による空襲を受けないというデマが広まったが、実際、周囲が被害を受けても爆撃されなかったという教会は相当数あって、教会が比較的爆撃されにくかった可能性は否定できない（例：資料1の2_2 松山教会、11_04 中林教会、資料2⑨⑩⑫）

いわゆる「戦時期の迫害」に関しても多くの記述が見られる。国歌斉唱、宮城遙拝、神棚設置、神社参拝などはほとんどの教会が仕方なく行ったものと考えられるが、そのことに敢えて言及している教会史誌は少ない。台南の東門教会および太平境教会は「断固として拒否した」と述べているが、それ以外の教会で抵抗を貫いたと述べているものはなく、また抵抗をした二教会にしても、具体的にどのように抵抗できたのか、最後まで抵抗を貫いたのか、などの説明はなされていない（資料2⑨⑩）

戦時中、教会は軍国当局からスパイ視されていたが、さまざまな理由で投獄された牧師や信徒が多くいた（資料1の3_02, 2_09など）。南部では信徒の名簿を提出するように要請があったという（資料1の5_06, 7_00）。投獄された事例のすべてが教会史誌に記されているわけではないため、実際に投獄されたケースはもっと多かったのではないかと考えられる。この「迫害」は必ずしも日本当局による直接的なものだけではなく、周囲の台湾人の教会への反感によって引き起こされたケースもあったようだ（資料2⑫）

告発される危険性について「注意」が足りずに大きなトラブルになったケースもあった（資料2②）。教会の中ならば安全だと思って天皇よ

りもイエスの方が偉いと日本人児童に答えて警察に連行された神学生の張逢昌は、戦後は親国民党を代表する牧師になっている。戦前の経験が戦後の政治的姿勢にどのように影響したかを考えさせられる事例である。

伝道者や信徒が警察に連行された事例は数多くあったものの、平地の場合には投獄、刑罰、拷問などの典型的な「迫害」のケースは少なかったようだ。その中で牧師や信徒が執拗に取り調べや拷問を受けた鳳山教会の事件（資料2⑫）は珍しいケースである。東里教會（資料1の1_8）や花蓮港（資料2①）も明らかな迫害のケースである。東里教会は原住民と近い平埔族、花蓮港教会は原住民族との接触を持つ漢族の教会だったため、この二つの教会の事例は原住民への迫害の文脈で理解されるべきであろう。山地の原住民伝道の現場は常に警察の厳しい迫害にさらされ、信仰者は罰として叩かれたり労働に従事させられたりするものが常であった（資料1の太魯閣中会以下を参照）。

まとめにかえて

各個教会史誌は教会の起源や内部の発展（伝道者、長老執事、信徒、教勢、活動など）を記すことを第一の目的としている。戦時中には教勢は停滞したので、記録する材料がないと考えられた場合にはその部分は省略されている。一方、歴史を叙述した関係者が戦争の教会に与えた影響について少しでも考察した場合には、戦時中の経験が叙述されている。とはいえ、戦時期には礼拝出席が激減したり集會が休止になったりしたため、教会史誌が発行された時点で当時の教会の様子を語ることできる関係者が多くなかった可能性もあろう。いずれにしても、戦時期の経験にしっかりと言及したものは数としては多くない。しかし全体的な傾向を窺い知るには十分な量のデータを今回の調査で得ることができたと考える。

今回の調査では多くのデータを集めることができたが、このデータを十全に分析するための課題がまだ多く残っている。第一に、各教会の所在地が都市部か山間部か、漢族居住地域か平埔族部落か、などの立地条件やエスニシティを含む社会的条件を確認する必要がある。特に戦時中の日本軍駐在地点との関わりを調べることによって、教会関係者が通った経験の意味をさらに的確に捉えることができるであろう。教会によって回顧文がしっかり残っている場合とそうでない場合があるが、それが彼らの経験の有無によるものなのか、それとも単に問題意識の深度の問題なのかについても、この立地条件の分析から判断することが可能になると考えられる。

第二に、教会史誌に記載されている戦時期への言及の中には教会関係者の回顧録などの別資料と重複しているものもある。教会史誌資料の叙述を批判的に読み込むためには、そのような別個の資料との突き合わせが必須である。そのような作業を経て、今回資料として公開したデータ一覧もより信憑性の高い資料として今後の台湾キリスト教史研究の進展のために提供することが可能になるだろう。

最後に、教会史誌資料には当然のことながら数多くのテーマへの言及が含まれている。本稿で言及しただけでも宋尚節伝道や中部大地震などがあり、また筆者自身が研究関心とする戦前の青年会（YMCA）運動、戦後のPCT倍加運動（信徒数を倍増させることを目的とした戦後の伝道推進運動）、それ以外のテーマについても手がかりとなる資料が多く見られる。そのようなキリスト教史研究のテーマについて、本稿で示したのと同様あるいは類似した手法を用いて教会史誌を歴史分析の素材とすることによって、台湾キリスト教史研究に新たな未来を切り開きたいと願うものである。



写真 1. 各個教会史誌のいくつかの例

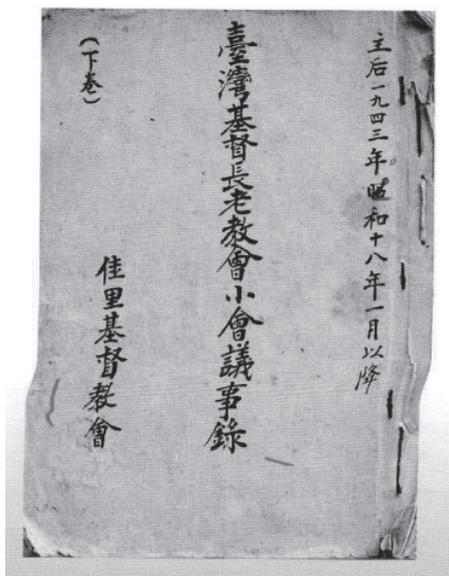


写真 2. 佳里教會小會議事錄 (1943 年) (『佳里教會 105 週年紀念特刊』より)

資料1：PCTウェブサイトおよび各個教会史誌に見られる戦時期台湾の教会経験に関する記述一覧

番号	現在の 中会	現在の 名称	旧称	設立年月日	昇格 年月日	分類	長老教会ウェブサイト上の教 会簡史に記載されている戦 時期前後の敘述	教会史誌に記載されている 戦時期前後の敘述 ※長文資料はく資料2を 参照
L_01	東部	台東教会		1924/ 3/24	1935/10/ 6	漢族・ 平埔族？	侯連湖伝道師(1928～1930年)；高瑞莊伝道師(1931～1932年)；林再添伝道師(1933～1938年)；劉約翰牧師(1938～1942年)；陳瑞山牧師(1943～1951年)	1942年4月に劉牧師が退任してからしばらくは無牧。1943年1月19日午後2時、基督教戦時奉公団台東地方部が台東街壮丁集合所にて発会式を挙げる。上興二郎理事長が主持、信徒200名が参加(獻堂典札紀念冊、1972、13頁)。
L_02	東部	關山教会	里龍堂会	1930/10/27	1938/ 2/16	平埔族・ 漢族？	1938年2月16日中会において堂会に昇格。初代教会のように主を信じる人が日増しに増加し、場所が足りなくなったため1942年現在の和平路54號に禮拜堂を建てることを決議、また長老執事会にて蘇阿鈞伝道師、蘇阿城長老、溫吉安執事に新禮拜堂建設のための適当な土地を採すように依頼した。1945年の秋に大東亜戦争が終結した。	伝道者： 蘇阿均・于宗許(1936-1942)、 徐謙信(1942-43)、 1943-46年は小会議事録が存在せず。戦時中に教会建築。(60週年紀念特刊、2011)

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

1_03	東部	池上教会	1928/ 8/21	1938/ 2/27	客家?	1939年3月5日に堂会に昇格。	教会史誌未確認
1_04	東部	花蓮港教会	1890/ 9/ 4	1933/10/25	漢族・原住民	1940年高麗莊牧師の時代に、木造の尖塔を持つ美しい聖堂を建築し、1940年12月15日に獻堂式および自立7周年慶祝典を挙行した。この間、宋尚節博士が台湾を訪問してリバイバル集会を行い、信徒は台北、台中、台南に赴いて参加。教会に大きなリバイバルが起こり、教会堂に人々が入り切れないほどになった。	鍾仁心(高麗莊牧師夫人)による回想(80周年記念特刊, 1987)→<資料2①>
1_05	東部	鳳林教会	1916/ 7/25	1931/ 3/ 3	客家?	1933年1月22日に第一回目の和会を開き、4月2日に袁新枝伝道師を第五任目の伝道者として迎えた。1934年4月4日に柯施恩伝道師を迎えた。1935年1月6日青年会が成立し、家庭礼拝と金曜日の新舊会を開始した。1936年4月1日に設教20周年慶典を挙行し、第一任牧師に溫榮春が就任。教会は独立自治の堂会として成立した。1939年5月25日の第49回小会におい	教会史誌未確認

						温養春牧師離任を承認。1940年5月に徐復増牧師が第二任牧師として就任。その後、徐牧師は中会において第10～12回議長をつとめた。
1_06	東部	加葉山教会	觀音山教会 Koan-im-soan	1877/ 1/ 1	平埔族/ 原住民	伝道者： 陳元武 (1936-1938), 卓輝力 (1938-1939), 朝文池 (1939-1941), 陳惠南 (1842-1943) (130週年紀念特刊, 2007)
1_07	東部	玉里教会		1917/11/ 1	平埔族	1930年、礼拝堂は關帝廟の向かいにあったが、しばしば集会在演劇の騒ぎで妨げられていたので、中城里の黃清良先生の住宅を購入して礼拝堂として改築した。ここで18年が経過して信徒も増加し、その頃の時勢も変わり、市街地が遠く感じられるようになり、建物も小さく不便に感じるようになった。
1_08	東部	東里教会	大庄	1905/12/17	平埔族	1924～1940年に自立教会として成長した。この頃の教会組織は健全で、議長は許振芳、長老は潘阿述、林

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

1_09	東部	富里教会	公埔	1877/ 4/ 3	1937/ 4/11	平埔族	<p>慈祥、潘阿芳、簡松如、執事は潘阿吉、陳田、林書嵩、番季生であった。当時堅信礼を受けたのは2人で、成人洗礼は8人、幼児洗礼は16人、そして日曜学校平均出席は40人であった。本教会は自製の憲法を持つ自治教会であった。</p>	<p>された。ついに再び捕えられ、日本人によって十字架に縛り付けられ、鞭打たれたお前たちのイエスのようだ」と言われた。叔父はこのような光栄をもったいなと思いい、心に喜びを感じて微笑んだ。日本人はそれを見て野良犬に叔父を咬ませたため、体中が傷だらけになり、口から沢山の鮮血が吹き出した。こうして一週間もせずに主のために殉教した。(林如蘭回顧、設教100周年記念特刊、2007、30頁)</p>
				<p>1937年4月11日に堂会に昇格。1938年に富里教会と改称した。1951年に地震によって礼拝堂が全壊した。</p>			<p>伝道者： 鄭鐵(1936-1938)、 許復增(1938-1939)、 莊辛茂(1939-1940第一任牧師に選ばれたが過労のため死去)、謝福元(1941-1944身体衰弱のため辞任)、陳惠昌(1944-1946)。太平洋戦争勃発以降、教会に対する日本人の圧力は日増しに強くなり、教会の一切の活動は干渉され、信仰の自由を失った。終戦とともにブス</p>	

2_01	七星	豊連教会	牛埔庄講義所	1913/ 3/ 3	1918/ 2/26	漢族	<p>1928年に教会は幼稚園を開き始めたが、それは現在の教会幼稚園の働きに先鞭をつけるものであった。1939年に日本政府は中山北路を拡張するために本教会は取り壊された。1949年、現在の土地に二階建ての礼拝堂が建築された。</p>	<p>ン族やアミ族への伝道を開始した。(100周年記念特刊, 1977, 189-190頁)</p> <p>1939年以降、総督府による現在の中山北路にあたる道路の拡張工事のため豊連教会の礼拝は台湾神学院の講堂を使用していたが、第二次世界大戦勃発に伴い台湾神学院およびマカイ病院は軍隊が使用するために占拠されたため、別の場所に移転。キリスト教徒は思想および行動面において強力な圧力をかけられ、日本当局の命令により礼拝の際には国旗掲揚、国歌斉唱、向上禮拜、日本語使用を義務づけられたが、教会はそれでも元来の礼拝方式を固く守り、政府の圧力を耐え忍んだ。</p>
2_02	七星	松山教会	錫口教会	1875/ 9/ 2 マツカイ11	1924/ 1/ 1	平埔族・漢族?	<p>錫口教会の尖塔を持つ建築は長らく錫口下街のランドマークだった。1932年に教会を改築した際この尖塔は残したが、「錫口教会」の</p>	<p>伝道者： 徐春生 (1923-1965)。 太平洋戦争勃発後日本人による教会統制が激しくなったが、徐春生は北部中会議</p>

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

2_03	七星	南港教会	三重埔教会	1874/ 3/ 1 マツカイ	1952/ 1/ 1	看板は「松山教会」に代えた。	<p>長として積極的に施政40年の全台湾信徒大会や宋尚節伝道(いづれも1935年)に奔走、それが認められ褒賞された。1938年米軍による松山発電所爆撃の際、誤爆で松山教会付近に爆弾が落ち、多くの市民が死亡。教会は死体収容所になり、再び褒賞された。1940年徐春生および数名の教会関係者が日本の全国信徒大会に参加、1941年太平洋戦争勃発以降は教会運営はさらに困難に。松山教会は発電所と飛行場に近く非常に危険であったが、聖日礼拝は途切れることなく継続できた(105週年暨礼拝堂重建献堂記念冊、1980、頁数記載なし)。</p>
				マツカイによって設立されたが一時的に集会停止。その後1930年代に伝道局の直接管理下で伝道再開。太平洋戦争末期、林伝道師は空襲のため疎開し、本教会は李雅各牧師の世話になった。光復後は徐謙牧師が就任した。		伝道者： 林川(1934-44)、 李雅各(1944-45)。 米軍による空襲時、林伝道師一家6名は空を求めて南投県竹山鎮付近社寮和後溝坑帯へ逃れた(林明基回顧、135週年紀念特刊、2009、184頁)	

2_04	七星	沙止教会	水返脚教会	1882/ 1/ 2 マツカイ	1906/ 1/ 1	1884年に清仏戦争が勃発した際、北館の7礼拝堂は焼き討ちに遭った。唯一水返脚教会は教会所有でない建物を借りていたため多くの教会員は逃げ出し、ただ建物内部の設備が壊されるにとどまった。翌年6月の講和会議の後、教会員は礼拝に戻るようになり、教勢も日ましに増加した。 1890年5月3日水返脚礼拝堂が落成した。当時の信徒は力を合わせて献金し、1901年北部教会としてマツカイ牧師を記念して「水返脚」と「打馬煙」の二軒の石造りの礼拝堂を「馬借記念礼拝堂」とした。1964年8月には沙止教会の聖堂も再建された。	伝道者：陳榮宗 = 戦争によって青年の大部分が出征し礼拝出席が激減したため、木柵教会に転任。かねてより台湾神学院の宿舎が不足していたため牧師館を呉天命院長宿舎として提供していたが、第二次世界大戦勃発後は伝道局が伝道者を派遣しなくなつたため、院長一家は正式に牧師館へ引越し、教会員に歓迎された。時局の故に毎日曜日は市民が奉公活動に動員され、礼拝には老人・女性・子どもばかりが出席。時には礼拝出席者は一人で、牧師夫人が奏楽。三重埔から水返脚に礼拝堂が移動。礼拝停止を呉天命牧師に勧めた会員もいたが、出席者が一人もいなくとも椅子に向かつて説教するとの答えを聞いて感動し、それから毎週出席するようになった(100週年特刊, 1984, 21-22頁)。
2_05	七星	基隆教会		1875/ 6/27 マツカイ 9	1919/ 1/ 1	1938年鄭君芳牧師就が伝道師として就任。1940年愛育幼稚園設立。1945年第二次	伝道者： 葉金木主任牧(1928-1938)、 鄭君芳協力伝道師(1938-)。

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

2_06	七星	暖暖教会	金山	1879/ 7/ 6 マツカイ22	1979/ 7/ 6	平埔族	世界大戦の際、本教会は同盟軍の空襲によりほぼ全壊したため、マツカイ牧師(子)を通してカナダ教会から700米ドルの援助を受けて四散していた建材を再利用しつつ教会を復元した。	1944基隆愛育幼稚園開園。1945米軍による爆撃によりほぼ全壊(献堂記念特刊, 1984)。
2_07	七星	金包里教会	金山	1879/ 4/ 1 マツカイ20	1979/ 4/ 1	平埔族	早期にマツカイ博士が1972年に基隆河沿いに四圍の教会(三重埔, 雞籠, 錫口, 暖暖)を建てた。戦時中は多くの困難が教会をおそったため、暫時、母会である基隆教会において集会をした。	1900-1951年の教会の様子はわからない。戦時期には教会は閉鎖され、信徒は基隆教会に集っていた(120周年特刊, 1999)。
2_08	七星	瑞芳教会		1919/ 3/ 10	1932/ 1/ 1		1936年に卓恆利牧師を第一任牧師として迎え、5月12日に典礼を挙行した。1939年には信徒が増しに増加したため、礼拝堂に入り切りなくなつた。そこで新礼拝堂建築計画が立てられ、余火旺長老が龍潭堵の土地(即ち現礼拝堂所在地)を捧げ、余聰明が建築設計を担当し、建堂工事が始まつた。1939年8月27日に落成、	教会史誌未確認

2_09	七星	九份教会	1933/ 8/10	1938/ 9/29	<p>教会は柑子瀬から新礼拝堂に引越し、讚美礼拝が挙行され、礼拝堂内部の天井が完成するのを待ってから献堂礼拝を挙行した。</p> <p>卓輝力が1934年に第一任伝教師として、1939年8月19日に卓輝隣が第一任主任牧師として招聘された。</p> <p>第二次世界大戦による爆撃で、人々はそれぞれに避難し、僅かの信徒しか残っていないかった。しかもこれらの信徒は巡回する官憲からの圧力にさらされ、日本語による集会しか許されなかった。卓輝隣牧師も戦争中に捕えられ、教会はほぼ停止状態に陥った。卓輝隣牧師は戦後になってようやく釈放された。その後もしばらく教会は昔のようではなかった。</p>	<p>卓輝力が数十年牧会(100周年記念特刊, 1987)。戦時期への言及なし。</p>
2_10	七星	雙溪教会	1887/ 5/20	平埔族	<p>今日の礼拝堂は卓開日牧師時代に信徒が協力し合って砂や石を運搬しながら鉄筋コンクリートの聖殿を建て、1945年に完成したものである。</p>	<p>卓開日牧師が数十年牧会(100周年記念特刊, 1987)。戦時期への言及なし。</p>

各回教会史誌から見てくる戦時期台湾のキリスト教徒

2_11	七星	宜蘭教会	1887/ 4/ 8	平埔族	1941年に偕田先生が土地を捧げ、現在の住所に移転した。	1930年代後半、バルト神学に影響された日本帰りの若手伝道者が時代と格闘し、北部教会を改革。宜蘭教会の鄭蒼国もその一人だった(宜蘭伝教70年節史, 1953)。日曜学校では日本語の歌を習っていた。戦争が始まって爆撃が激しくなり、教会近くの医院が爆撃を受けた影響で教会堂も損壊し、ある長老宅も深刻な被害を受けた。(曾清雲長老回顧, 120週年, 2002, 51-53頁)
2_12	七星	頭城教会	1886/ 6/22	平埔族		教会史誌未確認
2_13	七星	礁溪教会	1920/ 4/20	1977/ 2/27	1937年、伝道局が教会建堂を奨励し、家賃補助を停止して建堂費用借款にした。これを受けて教会での話し合いの後、予算3000円で会堂建築することを決定。翌年、伝道局より600元を借り受けて、440.598坪の土地を時価の毎坪1元で購入した。1940年4月16日、礼拝堂と伝道師の宿舎が完成し、献堂礼拝を挙行。同時に20週年を祝った。	伝道者：柯施恩。 吳光輝回顧：淡水中学から学徒兵として動員された(80週年紀念特刊, 2000, 24-30頁)

2_14	七星	羅東教会	1904/ 4/ 5	1929/ 1/ 1	平埔族	1936年2月23日，第一任専任伝道師の陳耀宗伝道師が本教会に派遣された。1941年8月7日は牧師としての接手を受け1977年に退任した。	伝道者： 陳耀宗 (1936-1977)。 戦時中の会員は僅か20名ほどに減少 (105週年特刊，2010)
2_15	七星	三星教会	1895/ 1/ 1	1979/ 8/ 5			第二次世界大戦時，三星教会の赤煉瓦式建物は荒れ果て、常に老兵が中で賭博をしていた (110週年記念特刊，2005，13頁)。「戦後のことか?」
2_16	七星	利澤簡教会	1883/ 2/ 8	1994/ 2/ 21	平埔族		マツカイ死後徐々に衰退し，1914年に徐春生が羅東教会に就任した頃は無人礼拝堂に。戦乱，人事，文化衝撃，人口流出などが理由。戦後に復興 (120週年記念特刊，2004)。
2_17	七星	蘇澳教会	1918/ 4/ 20	1950/ 1/ 1		1936年中山路121號 (現彰化銀行)の土地を購入。22年間で5名の伝道師：陳旺，李潤口，吳森祥 (再任)，陳耀宗 (常主動在本会無牧者時來兼任)，曹添旺が歴任。	1941.11.2に3名が受洗 (80週年記念特刊，1998，26頁)。
2_18	七星	大南澳教会	1914/ 1/ 1			不幸にも1943年に礼拝堂が火災のため焼失したが，7年後に教会は再開された。	教会史誌未確認

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

3_01	台北	李春生 紀念教会	大龍峒礼拝堂 →枋寮礼拝堂	1875/ 8/15 マツカイ10	1935/ 5/ 5	漢族	1942-1945年は議事録なし。 信徒は疎開で離散した(50 周年紀念冊, 1985)。
3_02	台北	大稻埕 教会	大龍峒礼拝堂 →枋寮礼拝堂	1875/ 8/15 マツカイ10	1901/ 4/ 1	漢族	張崑徳による回顧「抗戦時 期教会状態」：いわゆる皇 民化により各家庭に大麻が 配布され、宗教活動に統制 が加えられた。官憲が牙を 剥き、プロテスタントやカ トリックの聖職者、信徒の 言動を絶え間なく見張り、 うっかり口を滑らせて投獄 され罰を受けた者は枚挙に いとまがない。また高等刑 事が礼拝堂に入つて来て統 制しようとした (100年史冊, 1975, 27-28頁)
3_03	台北	大橋教会		1885/ 6/ 1	1962/ 1/ 1		教会史誌未確認
3_04	台北	三角埔 教会	舊仔頂 教会	1878/ 4/14 マツカイ17	1914/ 4/15	平埔族	伝道者： 謝復元(1936_ 1939), 呂阿加(1939-42) 李鏡智牧師(1942年-) (100周年紀念特刊)。
3_05	台北	鯤鯓教会		1876/ 3/14 マツカイ12	1906/ 1/13	漢族	1945. 1.14に開かれていた 会議が空襲警報により即閉 会になった(鯤鯓教会80週 年紀念冊, 1956)

3_06	台北	雙園教会	1935/ 7/20	1940/10/ 1	1940年冬に堂会が成立。 1942年に石安慎牧師を第一任の牧師として招聘。1949年に雙園基督長老教会と改称。	戦時期に関する言及なし
3_07	台北	文山教会	1898/ 8/ 1	1954/ 4/17		戦時期に関する言及なし
3_08	台北	新店教会	1874/ 7/26 マツカイ 8	1885/ 5/17		1934莊丁昌が牧師に就任。 1939莊丁昌東亜伝道会から廈門に派遣され、蕭榮善牧師第就任。二次世界大戦末期、礼拝堂は軍部に占拠され、礼拝は日曜学校の教室で挙行された。1943莊丁昌が廈門より戻り、再び牧師に就任(120週年記念特刊、1994、8-9頁)。 蘇慶輝による回顧(聖殿改建獻堂記念冊、2010、133-134頁)→<資料2②参照>
3_09	台北	三重埔教会	1940/ 7/ 7 マツカイ 6	1941/ 6/14	1940年、聖霊が大稻埕教会に余約東、郭乞生、李天來及陳啟賢の4名の長老を三重埔に遣わし、福音開拓の働きが始まった。当時毎月20円の家賃で現和平街に民家を借りて5〜6坪ほどの客間において「講義堂」と	戦時期に関する言及なし

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

3_10	台北	新莊教会	後埔仔礼拝堂 後遷新庄	1876/ 6/18 マッカイ13	1939/11/11	主に漢族	<p>伝道者： 呂阿加 (1934-1939), 黃六黠 (1939-1947) (120週年紀念, 130週年紀念)</p>
3_11	台北	聖望教会		1936/11/25		<p>1937年, 日本籍の小倉謙治牧師が「聖望」-「希望成聖」の意味を持つ教会を始めた。イギリス宣教師のグッシュテイラー医師が礼拝を導き, 信徒数が大いに増えたため, グッシュテイラー医師は礼拝堂の必要を深く感じ, 募金活動を開始したが,</p>	<p>教会史誌未確認</p>

						間もなく第二次大戦が勃発したために台湾を離れなくてはならないことになったため、募金も停止になった。	
3_12	台北	蘆洲教会	洲裡 和尚洲	1873/ 6/23 マツカイ 5		漢族	一時は300名の礼拝出席者があったが、1940年7月に大稻埕教会が蘆洲莊(今三重埔)に分教会を設立したのに伴い、集会を停止。1947年より荒廢していた蘆洲教会を復興させた。
3_13	台北	五股教会	Go-ko-Khi 五股坑	1873/ 3/ 2 マツカイ 2	1983/ 3/ 2	平埔族	マツカイ逝去以降、1910年代から1960年代後半まで50年ほど教会は荒廢していた(128週年紀念特刊、2001)
3_14	台北	八里教会	八里坌 教会	1874/ 3/22 マツカイ 7	1966/ 1/ 3		教会は初期は盛況だったが信徒が台北に移り第二次世界大戦中は集会が停止した。各種の文書資料も失われており、いつ頃教会の礼拝や集会が再開したのかを知ることは難しい。
3_15	台北	板橋教会		1882/ 4/ 9	1950/ 1/ 1		伝道者：袁新枝 戦時期に関する言及なし
3_16	台北	三峽教会	三角湧教会 Sa ⁿ -kak-éng	1876/10/ 5 マツカイ 14	1914/ 5/ 1		建堂事業を推進していた頃、多くの不幸が教会をおそった。七七事変以降の勢により教会建築が困難になったのみならず、本教会

教会誌誌末確認

伝道者：袁新枝

戦時期に関する言及なし

駱先春「離忘的三峽」(三峽教会100週年, 1981)→<資料2 ③>

各個教会史誌から見てくる戦時期台湾のキリスト教徒

3_17	台北	樹林教会	1927/ 7/ 1	1936/ 2/ 8	<p>の駱先春牧師と陳文賢長老とが、マツカイ医院理事会の事務に関することで罪に問われ66日間投獄されたのである。このように外にあっては日本の時勢、内にあっては教会事務の困難があったて教会建設事業はただ天を仰いで嘆く他なかった!</p>	<p>1929年春、教勢がだんだん盛んになり、黄介山執事宅の斜め向かいにある民家に引っ越し、そこを借りて講義所とした。1936年申会議決を経て講義所から教会へと昇格、同年2月23日初代長老として盧石泉、盧天送を、初代執事として蔡金鐘、簡材が選出された。</p>	<p>1941年から教会は隱着状態。1948年まで完全無牧(60週年特刊, 1987, 22頁)。戦時中には集会結社の自由がなく、事あるたびに監視妨害されるので、誰も敢えて教会に来ようとしなくなつた。蔡金鐘長老の取り計らいで康清塗伝道も徳豊煤鉱の仕事についた(70週年特刊, 1997, 9頁)。</p>
3_18	台北	士林教会	1893/ 3/ 9	1950/12/11	<p>八芝蘭教会 Pat-chi-lan Pat-chi-na Pattsiran</p>	<p>伝道者： 陳四治(1938-1946)。戦時中は給料が低く経済的に苦労した。会堂のために土地を購入しようとしたが大直要塞の近くで軍事目的以外は建築禁止だった。(105週年暨建堂40週年紀念, 1998, 50頁)</p>	<p>伝道者： 陳四治(1938-1946)。戦時中は給料が低く経済的に苦労した。会堂のために土地を購入しようとしたが大直要塞の近くで軍事目的以外は建築禁止だった。(105週年暨建堂40週年紀念, 1998, 50頁)</p>

3_19	台北	淡水教会	滬尾教会	1872/ 4/10 マツカイ1	1919/ 1/ 1	漢族	1937年「七七事変」発生後、日本人は教会に「国民精神總動員」に足並みを合わせようとして強制し、翌年には礼拝前に日本国歌を歌い、天皇を遙拝するよう迫ってきたので、仕方なく礼拝形式を改めた。淡水中学と淡水女学院が政府に接収されて学生が礼拝に来なくなり、西洋宣教師が国外退去になったことは、教会にとっても大変な打撃であった。	戦争が激しくなると田舎に疎開する人々が増えた。淡水教会も例外ではなく、教員が激減して財政的に大打撃を受け、礼拝堂は日本軍に借用された。機撃にあったが、窓ガラスが割れる程度で済み、戦後間もなく礼拝と日曜学校を開始した(100周年特刊, 1972, 18頁)。
3_20	台北	坪林教会		1923/ 5/23			1923年5月23日に坪林教会が創立され、後に有李潤口、潘文才、吳榮祥等の神学生が福音伝道の手伝いに来た。しかしこの地は迷信が強く人々は古いものに固執した上で、無牧状態が続いた上、1935年には暫時教会を閉鎖した。閉鎖して18年後、1953年に至って再びキ教会が再開された。	1939年以降、伝道者が減少し、伝道局からの伝道者派遣がなくなり、聖日礼拝の説教者だけが派遣されるようになった。1942年より戦争が激しくなり、時局の不安と山道はたびたび中止に由で集会はたびたび中止に(「樹林重重的坪話教会」新店教会設教140周年紀年, 2014, 187-198頁)。
4_01	新竹	中壢教会		1886/ 1/ 1	1929/ 1/ 1	客家	1929年に堂会に昇格し1940年に自給独立を果たして牧師を招聘した。その後教勢が次第に盛んになり、信徒	1936郭和烈、1937徐復増、1939陳瑞山、1943鄭鐵(110周年, 1996)

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

4_02	新竹	龍潭教会	1892/ 8/12	1977/ 7/ 7	客家	が中壢, 新屋, 楊梅, 富岡, 湖口などの地域から来るようになった。	教会史誌未確認
4_03	新竹	桃園教会	1885/11/ 1	1904/10/ 4			伝道者：蔡長義 (1931-1954) (110週年記念特刊, 1996)
4_04	新竹	大溪教会	1889/10/31	1972/ 1/ 1		済仁診療所の医師林錫金が1939～1940年の間に大溪镇下街地方に大溪下街長老教会を提供した。大溪分会は当時楊国璋伝道師が駐堂して牧会していた。1942年に第二次世界大戦が勃発すると、日本警察がキリスト教徒を迫害したため、教員は離散してしまった。	第二次世界大戦中は警察による信徒迫害によって教会は十数年におよぶ閉鎖を余儀なくされ、信徒は離散した(獻堂感恩特刊, 120週年特刊, 2011, 8頁)
4_05	新竹	南崁教会	1892/ 2/14	1957/ 5/12		1937年に日本軍と我が大陸との戦争が発生すると、教会の集会は影響を受けた。1942年、吳哲道伝道師の任中、日本軍は礼拝堂を占拠した。	1937年に戦争が始まると、青年および壮年が皆軍夫として応召され、一部分は軍警として動員されていった。空襲が日増しに激しくなり、人心は恐慌としていたが幸いにも教会信徒は尚固く主により頼むことができた。一般の人々は応召者が徴用されていくのを見て、神を求めめ佛を拝み、迷信が非常

4_06 新竹	新竹教会 竹塹禮拜堂	1878/11/17 マッカイ18	1907 / 4 / 30 客家	<p>莊聲茂牧師は1936年4月18日に大甲教会より本教会に転任し、第四任牧師となった。任期中は教会の基礎を堅固するために努力し、信徒は円満で仲睦まじく、1936年8月10日には北埔教会を分設、1939年は竹林教会を分設した。この誠実な奉仕の輝きは決して消えることはない。1937年7月7日に中日戦争が勃発し、日本政府は教会に圧力を加えて来た。莊牧師は二度も入</p>	<p>に増えた。1942年潘打毛伝道師離任後、呉哲道伝道師が赴任、間もなく日本軍が禮拜堂を占拠した。この時期の日曜学校、家庭禮拜、洗礼および聖餐式はすべて停止した。日曜学校は逢春医院で集会を行った。幾ばくもせずに教会は伝道者の謝礼金を支払うことができなくなり、呉哲道伝道師は無給で献身的に奉仕を続けた。</p> <p>(南崁教会101週年紀念特刊, 1983, 12頁)</p>
				<p>台湾教団設立時、牧師、役員、信徒の苦悩は想像を超えたものであった。莊聲茂牧師が二度拘禁された。一度目はスパイ容疑で14日間、二度目は天照大神、天皇とキリストの關係について、不敬罪の嫌疑で53日間拘留された(80週年特刊, 1957, 頁数記載なし)</p>	

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

4_07	新竹	新埔教会	1910/ 2/ 8	1929/ 1/ 1		獄させられたが、一回目はスパイ容疑で14日間拘禁され、二回目は天照大神に関する見解、天皇とキリストの関係、不敬罪を冒したとの嫌疑で53日間拘束された。これは本当に福音のためを受けた苦難であった。	教会史誌未確認
4_08	新竹	關西教会	1922/ 5/ 1	1951	客家	1931年伝道局は正式に1名の伝道師が駐堂するように定めたので教勢が安定した。しかしその後第二次世界大戦中には教勢は落ち込んだ。	教会史誌未確認
4_09	新竹	竹東教会	1923/11/12	1950/ 4/12	客家	1935年9月6日に会堂が落成し、献堂。1936年より1945年は湯鼎紅伝道師が駐任した。その後の教勢は日増しに旺盛になり、1950年4月12日に堂会に昇格した。	教会史誌未確認
4_10	新竹	竹南教会	1936/ 4/ 1		客家	1935～1936年の間、台湾には大地震が発生し、苗栗地区の被災状況は悲惨だったが、頭份礼拝堂は民家にあつて不幸を免れた。当時日本基督教聯盟が礼拝堂の再	教会史誌未確認

4_11 新竹	南庄教会	1908/10/31	客家	<p>建のために3000円の補助を三軒の教会に提供した。北部大会の審議を経て、頭份礼拝堂は補助を受ける教会に選ばれた。日本基督教聯盟から提供された補助金に附された書信には交通の便の良い場所に礼拝堂を設立するように記されており、竹南は鉄道の山線と海線の交わる地点だったため、教会建設委員会の林彼得牧師とその他の委員が現在の住所に礼拝堂を建てたのである。1936年4月第一週に教会は正式に竹南に移転し、暫時民家を「竹南教会」と改称し、1939年8月15日に教会献堂にいった。</p>	
4_11 新竹	南庄教会	1908/10/31	客家	<p>1935年4月21日早朝に台湾中部大地震があり、礼拝堂の壁が損壊、台所は全壊した。同年10月に台北宣教師会の補助200元、および当時南庄にいた日本人信徒藤崎 済之助の献金150元、さらに南庄教会員の献金650元の合計1000元を得て礼拝堂を修繕し、宿舎の台所を</p>	教会史誌未確認

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

4_12	新竹	獅潭教会	1873/10/10			建築した。	教会史誌未確認
4_13	新竹	後龍教会	1873/ 4/ 6	2009/10/18		1888年にマツカイが伝道者、その後伝道者が派遣されるも低迷して閉鎖。1955に再度布教。	教会史誌未確認
4_14	新竹	通霄教会	1915/ 1/15			在二次大戦時には卓輝力が伝道師として就任。しかし3ヶ月後に鄭連坤伝道師が派遣された。卓輝力伝道師がいつ離任したかは不明。	教会史誌未確認
4_15	新竹	苑裡(苑里)教会	1912/ 9/20	1939/ 4/ 6		1935年に大地震があったが、建築中の苑裡街礼拝堂は1936年8月20日に基礎工事をを行い、1937年3月20日に落成、献堂した。1939年4月6日に経済的に独立し自治堂会となった。	陳芳本牧師、謝路得夫人の回顧(苑裡「苑里」教会70周年記念特刊, 1982, 32頁) →<資料2④>
4_16	新竹	苗栗教会	1890/10/15	1933/ 3/21	客家	1935年4月21日、ちようど復活節の朝6時に台湾に大地震が発生し、礼拝堂が全壊。翌3月に礼拝堂を再建した。この会堂は木造だったが敷地が小さく、年ごとに会員が増えたので、不便であった。	伝道者： 林彼得牧師(1933-1972) (100周年記念特刊, 1990)

4_17	新竹	公館教会	愛寮下	1900/ 1/ 1	1933/ 1/ 7	<p>1933年の1月に堂会に昇格し、翌年4月24日に第一任の劉阿秀牧師の就任典礼を行い、自治会堂となった。1935年4月21日、台湾中部に空前の大地震が起こり、本教会は倒壊して深刻な被害を受けた。そこで第二回の礼拝堂建築に取りかかり、劉阿秀牧師のリーターシップの下に1936年7月21日に会堂が完成し、献堂した。</p>	<p>教会史誌未確認</p>
4_18	新竹	鯉魚潭教会	内社	1872/10/27		<p>1904年10月4日の台北中会で2名の牧師の同意と立会いの下、本教会は北部教会の管轄に移された。1942年には会堂は潘阿登長老宅があった土地に移転した。</p>	<p>1911-1938はほぼ空白の歴史。 (設教126周年記念特刊, 1997)</p>
4_19	新竹	敬仔腳教会		1908/ 4/ 5	1965/10/ 1	<p>1929年10月10日東勢教会の伝道所は第9任汪宗程伝道師時代、1935年4月21日中部大地震のときに同庄のすべての建物が全壊し、礼拝堂も例外ではなく、当日は日曜日だったが汪伝道師の教会内でも数名が死傷、全庄では1000人以上が重軽傷を負った。第8任の劉約漢</p>	<p>伝道者： 汪宗程 (1925-1936)、 劉約漢 (1936-1938)、 黃切 (1938-1942) 1935大地震 (80周年記念特刊, 1989)</p>

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

4_20	新竹	東勢教会	1926/10/25	1970/ 3/ 2	客家	<p>先生が就任後、地方士紳の張取先生から当時の礼拝堂と別の土地とを交換し、日基督教団「日本基督教連盟」からの補助3000元を得て、木の礼拝堂と宿舍を建て、1936年3月21日に献堂典礼を行った。</p> <p>1934年9月9日、母会の後里墩仔廟教会が東勢支会第一次小会を招集し、俾彼得宣教師が議長、溫榮春伝道師が書記であった。後に莊聲茂牧師が議長、溫榮春、湯鼎紅伝道師が書記、陪餐者は20人近くになった。しかし1940年に第二次世界大戦が勃発し、戦争が長引くと、信徒は疎開し、福音伝道の働きは停止し、暫時吳景春長老宅にて集会を行うこととなった。福音伝道の働きを維持することができなかつたため、この時期に関する文書は欠落している。</p>	戦時期に関する言及なし
4_21	新竹	大甲教会	1909/ 7/14	1912/ 1/ 1		大地震に言及	
5_01	台中	柳原	1898/ 5/ 8	1917/ 3/ 6	平埔族・漢族?	本教会は創立当初より熱心に伝道し、教会を分設した。	伝道者： 劉振芳主任牧師，

5_02	台中	豊原教会	葫蘆敬福音堂	1900/3/18	1922/10/29	平埔族？	教会史誌未確認
5_03	台中	大社教会		1871/1/1	1896/2/25	平埔族 バセー族	伝道者： 呂春長 (1941-1943)。

1899年クリスマスには大里教会、1910年は烏日教会、1914年は霧峰教会、1922年は西屯教会、1923年は大雅教会を設立した。惜しいことにこのうち2教会は第二次大戦中に閉鎖してしまっ
た。大戦終結後、設教50週年を祝うために、1947年に民族路教会を設立し、母会
は柳原教会と改称した。

洪萬成 (-1940)。
吳徳元 (1940-1944.4) 副牧師
中日戦争が激烈になって来ると、日本は排外主義をとり英国宣教師の在台工作に特別の注意を払うようになった。1939年8月宣教師会議は女性および子弟を先に帰国させた。日本政府は台湾教会に英国宣教師と絶縁するよう圧力をかけて来た。宣教師が教会に来ると嚴重注意を受けた。・・・
1941年12月8日、日本が英米に対して宣戦布告して間もなく劉振芳牧師は日本憲兵に捕えられ、19日間拘禁された。保釈後も憲兵や警察から監視されていた。福音伝道は不自由で、教会礼拝堂も日本軍が侵入し、毎
日空襲爆撃があり、信徒の多くが疎開して離散してしま
った。主日礼拝出席者は50-60名まで減少した。
(85週年紀念特刊, 1991, 27頁)

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

	<p>を開設し、1872年リッチー牧師と一軒目の礼拝堂を建設。1935年の中部大地震ですべての危険な建築物を取り除き、二軒目の礼拝堂を建設し、1937年6月2日に献堂典礼を挙行。</p>				<p>劉晉奇長老〔二林教会〕(1943-1945) 1941年、改姓名強制により本会でも潘存仁長老(神村俊男)、潘英昌執事(米澤英一)、潘舜卿長老(米田信夫)、潘元貞長老(豊田貞吉)、潘萬祝長老(平田豊彦)が応じた。1942.6.28より小会記録が日本語に改められ、1944.8.28まで6回開かれ、1942.10.27=70周年記念礼拝。1944戦争末期、大社教会の礼拝堂が軍用倉庫として強制的に使われた。ガラス張りの窓には黒い紙が一面に貼られていたため、中に何があったのかはわからない。礼拝は教会の小ホールで行った。1945.8.15日本敗戦に伴い、日本軍方は礼拝堂内の軍用品を運び出した。日本の敗戦は日本政府の悪行に対する神からの刑罰である。</p>	<p>(120年記念手冊, 1991, 99頁)</p>
5_04	台中	大里教会	1899/12/25	1951/ 1/ 1	漢族・平埔族?	1936-1938李素伝道師, 1938-1942顧臨伝道師。

5_05	台中 霧峰教会 烏日教会 烏日福音堂	1910/ 4/20 1954/ 2/24	1935年と1999年の2度の歴史的大地震によって無残に倒壊。	1940献堂式。半分くらい平埔族？郭朝成一家。教会家系図、教会員の家系図あり。(94週年, 1998) 吳徳元「駐在烏日教会回憶録」(75週年紀念特刊, 1985; 90週年紀念專輯, 2000)→<資料2⑤> 簡史より: 1939年に陳黃滿が日本から阿桃姑に記した手紙に、「日本の信徒は5, 6人で一軒の教会を支え、牧師の給料は一ヶ月50-60元です。それは信徒の月定献金, 教会を維持するための経常費を設けているからです。烏日教会も堅固な教会経済のために信徒の月定献金を設けることを希望します」と書いてあった。それを受けて阿桃姑は月定献金を皆に励まし、この時から月定献金が始まった。(100週年紀念特刊, 32頁) 伝道者: 張清俊 (1942-1943), 黄現田 (1943-1944), 吳徳元 (1944-伝道師)
5_06	台中 霧峰教会	1914/ 4/19 1937/ 3/25	1934年4月中部大地震にて	

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

5_07	台中	大肚教会	1903/ 4/ 1	1938/ 1/ 1	漢族	<p>1935年の復活節に清水墩仔脚の大地震により、大肚の信徒は暫時、茄投守にて主日礼拝を守り、大肚の礼拝堂改修が済んでから再び大肚にて礼拝集会を続けた。</p>	<p>聖殿が損壊し、1937年3月に新たに聖殿および牧師館を竣工。獻堂ならびに堂会昇格を挙行了。</p>	<p>黄主義 (1936-37), 許贊育 (1937-1947) 1933林攀龍入会 (2月)即長老就任 (7月)。1937. 4. 1 皇民化運動により台湾語使用を控える。白話字使用は禁止。1940. 4. 20-22 秋山・多辻伝道。1943. 4. 8 教会閉鎖および伝道活動禁止が命じられる。台南では日本の警察が教会に信徒名簿を出すように強制する。1944 教会集会が禁止され、礼拝堂は軍用倉庫あるいは軍用品加工工場として徴用される。1944. 8. 22台湾は戦争状態に入ったとの宣言。(90週年紀念特刊, 2005, 60-64頁)</p>
						<p>伝道者： 黄侯命 (1936-38), 謝清宜 (1938-43), 呂春長 (1943-50) 茄投に説教所を設立したものの、太平洋戦争中に日本政府が未だ布教所としての正式な許可が出ていないことを理由に停止を命命。(80週年感恩礼拝,1982, 3頁)</p>		

5_08	台中	清水教会	牛馬頭 基督教會	1895/ 4/ 1	1961/ 8/ 1	<p>1935年、台湾中部の大地震で深刻な被害を受け、聖殿は完全に倒壊、黄侯命牧師は中部震災の会堂再建委員として、任期中の羅文福牧師と心を一つにして励まし、萬丹の李仲義長老の支援を得て、現在の木造禮拜堂を再建した。1937年6月23日に獻堂し、清水基督長老教会と改称した。1945年に日本が投降し、本教会の住所表記は清水鎮文昌里中興街40號に変更した。</p>	<p>教会史誌未確認</p>
5_09	台中	南投教会		1909/ 5/20	1927/10/ 1	<p>1927年10月堂会に昇格。同年11月禮拜堂建築開始、1928年4月に落成。1949年2月28日譚緯教師を牧師として抜手し、本教会の副牧師として迎えた。</p>	<p>伝道者：吳天賜，謝緯。 皇民化運動による圧力で、漢文禁止、家庭内での日本語使用奨励、改姓名、天照大神、教会でも台湾語使用が禁止、禮拜前の宮城還拜が強制され、精神的苦痛を感じた。頼金枝長老が彰化中会参加の帰りに南投警察に拘禁され酷い目にあった。その意図は教会に嫌疑をかけて大きな事件を仕立てることにあった。が、長老は迫害に屈せず、案件は無事に処理され、教会は難を逃</p>

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

5_10 台中	草屯教会	1900/ 5/ 6 1924/ 3/12	<p>1902年から1904年、教会は次第に盛んになって犁店には入り切らなくなり、李発宅を借りて第二の集会地点とした。1908年から1911年、教会人数が増加し、信徒から礼拝堂建築が建議され、会員が心一つにし、周漏再教事が土地を捧げ、1913年に草屯地区で最も美しい景観の建築物が完成、ここを第三集会地点として47年</p>	<p>れることができた。教会堂は日本軍の倉庫に使用され、聖日以外の教会学校は礼拝堂の外で行わなくてはならなかった。その他の活動は一律に停止。青年会の数名が海外で服役したが戦後は皆無事に戻って来た。また南投への爆撃は二度あったが、教会は幸い損失を逃れた。</p> <p>1935年9月1日に託児所を設立したが、第二次世界大戦期間中には物資欠乏から停止。</p> <p>(60週年記念, 1969, 5-7 頁)</p>
			<p>伝道者：郭朝成</p> <p>1938：祈禱会、家庭礼拝振興を奨励。</p> <p>1941：会員に礼拝を守るよう奨励。</p> <p>1944：五家庭で行われていた礼拝を中止し必要に応じて臨時挙行することを決定。</p> <p>1945：教会で新聞を定期購読。</p> <p>(大事記, 80週年記念冊,</p>	

5_11	台中 赤水教会	1900/ 7/ 7 1941/ 3/25	<p>が経った。1927年10月12日には郭朝成を第一任牧師として招聘。教会内外は仲睦まじく、教会内外は仲睦まじく、すべての人に愛され、草屯鎮内の大小の事務は皆郭牧師が参加し、教会員と鎮民が一つの大きな家庭のようになって25年が経った。</p> <p>1924年赤水に再び移転して陳靖宅を借りて礼拝堂とした。1928年陳金龍の店舗を買い取り、陳丁長老より手当金を借りて、礼拝堂とした。以後本教会は平穩に発展し、1941年經濟獨立を果たし堂会に昇格、さらに社頭教会と合同で周藏全牧師を本教会第一任牧師に招聘した。</p>	<p>1980、16-17頁) 王榮福「在草屯教會教會二十五年的郭朝成牧師」(80週年紀念冊, 1980) →<資料2⑥></p>
5_12	台中 集集教会		<p>1927～1934年の間、伝道局は葉作乾、許水露、周榮受、陳來礼、莊清華、洪金などの伝道師を教会のために派遣した。洪金先生の時まで宿舎は老朽化し集会地点も不適當な場所であった。そ</p>	<p>1937年に日中戦争が勃発し、1939年からは排英運動が発生、日本政府は上下の官員に対して教会を嚴格に監視するよう呼びかけ、各種の集會が監視を受けたために教勢はだんだんと衰退、信教の自由はなかった。(台中中會 台灣基督長老教會歷史(員林、社頭、赤水、田中)、1956、33-34頁)。 教会史誌は未確認</p>

教会史誌未確認

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

5_13	台中	水里教会	水里教会	集 集 礼拝堂?	1925/ 4/ 1	1949/ 4/ 4	<p>ここで劉忠堅牧師の同意を得て、紀溫柔牧師が集集教会で開いた小会にて水里への移転を決議し、古い教会を400円で取り壊した。これは1935年のことである。</p> <p>1934年に伝道局は洪金先生を伝道者として派遣したが、その任期中、会堂の老朽化に耐えられず、集会场所も不適当だったので、劉忠堅牧師の同意を得て、紀溫柔牧師が集集にて開いた小会で水里への移転を決定した。1935年5月4日礼拝堂および宿舍5軒が完成し、5月15日信徒は集集より水里集会に移った。</p> <p>1907年に李炎伝道師が第一任日の伝道者となり、1918年日本当局に申請して基督礼拝堂の認可を得た。1922年に竹山街西邊に木造礼拝堂を建設、1959年に土地を購入して新礼拝堂を建築した。</p> <p>1880年、宣教師会よりスミス牧師が建築監督として派遣され、第2軒目の礼拝堂</p>	<p>王興武「教会感言」より(設教50週年, 1975)→<資料2⑦></p> <p>教会史誌未確認</p> <p>教会史誌未確認</p>
5_14	台中	竹山教会	竹山教会	林把埔 教会	1905/ 5/12			
5_15	台中	愛蘭教会	愛蘭教会	烏牛欄	1871/12/28		平埔族	

						が建築された。戦争中には屋根を修復したが警察当局に不許可とされ、1942年に取り壊しになった。 1945年羅文福牧師時代に木造の臨時礼拝堂が建てられ、1956年に超信恩伝道師時代に煉瓦建ての3軒目の礼拝堂を建築した。			
5_16	台中	埔里教会	1945/ 5/ 5	1951/ 1/ 25	平埔族	1885年烏牛欄教会(愛蘭教会の前身)は布教所を鎮上に分設した。1948年には鎮公所に日本の高寺式の礼拝堂を分設した。	教会史誌未確認		
5_17	台中	大滿教会	1870/11/ 1	1982/ 4/ 18	平埔族	礼拝堂が完成した後、皆で話し合っって李霸先生を第一任の伝道師として招聘することを決定した。1軒目の礼拝堂は木造だったので、60年が経過した頃に柱が腐敗、1934年には土壁の礼拝堂が建築された。	教会史誌未確認		
5_18	台中	牛眠教会	1872/ 2/ 1	1980/ 8/ 1	平埔族	1948年[?]第二次世界大戦中、礼拝堂は日本軍に占拠されて食料補給地となった。礼拝堂は日も当てられない状態となり、礼拝堂を再建しなくてはならなかった。	教会史誌未確認		

6_01	彰化	彰化教会	半線？ 通達教会	1886/10/31	1890/10/ 2	漢族	<p>伝道者： 蘇天明 (1935-1938伝導師)， 王守勇 (主任牧師1937-1948)， 陳光輝 (伝導師1938-1940)， 莫有源 (伝導師1940-41)， 劉華義 (副牧師1943-45)， 1936年4月に宣教50周年を 祝ったとき、彰化は中部地区 宣教の中心地になっていた。 福音伝道の働きに力を入れ ようとしていたちようどその 時、日本軍閥が戦争を發動し、 民衆の生活を緊張と不安に 陥れた。戦局の発展に伴っ て宣教師は帰国させられ、 物資は欠乏し、本教会が英 国から取り寄せた大きな鐘も また日本軍に提出させられた。 福音伝道の働きはこのように して一度は大きな壁にぶつ かったが、困難の中でも教 会員は王守勇牧師の指導下 で憂いを共にしつつ、心を 合わせて祈り、災難中の平 安を神に求めた。幸いなこ とに日本軍が投降し、台湾は 光復、私たちは再び祖国の 懐に戻ったのである。 (100周年紀年、1986、6頁)</p>
<p>1931年に保育園(現太平幼稚園前身)などを設立。宣 教の働きが発展しつつある 時に日本が大東亞戦争(第 二次世界大戦)を發動し、 戦局の拡大に伴い、外国宣 教師は帰国させられ、教会 は大迫害を受けた。信徒は 本地伝導師の導きの下に、 神の恵みを受けて、憂患を 共にしつつ、熱心に神を礼 拝し、力を合わせて宣教の 働きに取り組んだ。1945年 に戦争が終結し、宣教の働 きもまた新たな局面に入っ た。</p>							

6_02	彰化	花壇教会		1926/ 1/ 1	1961/ 7/ 1	本教会歴任伝道師： 夏禹，潘純榮，李美玉，江再添，陳滄發，周榮義，謝隆輝，姬啟裕，許文耀，胡茂仁，連瑞和，翁思惠，陳滄發	教会史誌未確認
6_03	彰化	鹿港教会		897/ 3/28	1925/ 1/ 1		教会史誌未確認
6_04	彰化	和美教会		1903/ 4/27	1937/ 2/15	1937年2月15日堂会に昇格；1937年9月14日至1952年許鴻議が第一任牧師。	教会史誌未確認
6_05	彰化	溪湖教会		1898/ 8/26	1925/ 1/ 1	1925年，堂会に昇格。在籍会員は49名。1926年，礼拜堂(現旧礼拜堂)を建築。1949年，萬興教会を分設。	教会史誌未確認
6_06	彰化	永靖教会		1940/ 9/15		1941年，黃侯命牧師が員林教会に赴任中だったとき，海豊崙，田尾の方面より約20名が集い旧消費市場の民家を借りて集会していた。初代伝道者の潘紀榮牧師が設立したが戦時体制のために軌道に乗らず，創設した教会も申請書が規定に合わないという理由で解散させられた。 当時の教会員は溪湖教会，北斗教会，カトリック教会に集うようになった。	教会史誌未確認

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

6_07	彰化 員林教会	1899/ 5/19	1921/10/11	1922年5月20日、禮拜堂を員林鎮中正里博愛巷61號に開設し、同年7月末に竣工した。同年8月20日、議長の林学恭牧師が獻堂典禮にて聖餐式を挙行了。1940年9月15日に永靖講義所を分設した。	伝道者： 黄侯命（1943）、 郭朝成（1943-44）、 李嘉嵩（1944-46） 永靖に講義所を設立したが、政府の許可が得られなかつたため1942年3月に講義所を閉鎖し、1954年になって再開した。 （簡史、1975、3頁）
6_08	彰化 社頭教会	1891/ 2/ 1		教勢は引き続き旺盛で、後に長教会が1934年1月28日に牧師宿舍を建築するため日本円100円で約46坪の土地（現住所）を購入した。	教会史誌未確認
6_09	彰化 田中教会	1919/ 3/10	1928/ 2/ 1	1919年3月10日に伝道所を開設し、1921年に支会が成立、1928年に堂会に昇格、さらに現住所にスコットランド式禮拜堂を建築し、同年10月に獻堂した。1949年戴榮旋牧師が赴任し、赴任中に牧師館、日曜学校教室を建て、婦人会、中学生会が成立した。	伝道者：黄仁壽牧師 黄牧師赴任中の12年間、第二次世界大戦前後、教会は日本人より圧迫を受け、日曜学校で教会ローマ字を教えたり台湾語で教えることを禁じられた。一部の信徒は疎開し、青年は志召して従軍したため、教会はその影響で一時的に荒廃し、損害にも苦しんだ。 （50週年史典、1969、4頁）
6_10	彰化 北斗教会	1923/ 7/12	1944/ 7/31	1936年、許天賜牧師任期中に禮拜堂を7月に竣工し、	教会史誌未確認

6_11	彰化	二水教会		1897/10/25	1928/ 2/ 1	1936年3月10日堂会に昇格した。	教会史誌未確認
6_12	彰化	竹塘教会		1932/ 7/ 1	1952/ 1/ 1	1935年信徒が増加したために場所が足りなくなり、隣接する購買店を礼拝堂として使用することになった。第二次大戦期間中、日本政府は福音に対する迫害を行い、止むを得ず2年間集会を停止したが、大戦終結後に集会を再開した。	教会史誌未確認
6_13	彰化	原斗教会	橋仔頭	1882/ 4/ 4	1902/ 3/ 4	1939年4月に紀明申牧師を第一任牧師として招聘	戦時期に関する言及なし
6_14	彰化	二林教会		1924/ 7/20	1939/ 7/ 1	1940年2月22日、新会堂の献堂式および李明意牧師を第一任牧師として招聘。	戦時期に関する言及なし
6_15	彰化	大城教会		1906/10/ 1	1940/ 2/ 1	1939年11月12日小会を開き台中中会(当時は彰化中会が成立していなかった)に對して堂会昇格を申請した。1940年6月16日堂会に昇格した。1941年3月9日台中中会を通して許乃萱牧師を本教会第一任牧師として招聘した。1942年9月27日、沙山段地 號第517之9及	教会史誌未確認
6_16	彰化	芳苑教会	番仔挖礼拝堂、沙山教会	1899/ 9/16	1940/ 6/16	伝道者： 紀明申(1935-1939)、 金進安(1939-1940)、 潘純榮(1940-1941)、 許乃萱(1941-1947) 許乃萱の回想：私が沙山にいた六年はまるで一日のようだった。その間に大東亜戦争、第二次世界大戦があり、皆と一緒に喜びも苦しみも	教会史誌未確認

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

<p>517之4號(斗苑路の現住所)の土地を購入し、埔里教会より提供された木材で木造の会堂を建築した。1943年10月13日、献堂感謝礼拝を挙行。</p>	<p>分かち合い、空襲の危険にさらされ、物資欠乏に苦しんだ時代は、実に忘れることのできない日々である。(85週年紀念特刊, 1984, 15頁)</p>
<p>1946年10月27日台風により会堂が吹き倒され、永興橋が遮断された。そのため王功地区の交通が不便になり、教会を分設、さらに1947年1月12日、煉瓦建ての会堂を再建した。</p>	<p>年譜： 1940：暴風雨により礼拝堂が損壊。 1942：窓をガラスに交換。 1943：新礼拝堂献堂。 1945まで聖礼典および成人会員受け入れ。[日本軍に使用された形跡なし。](100週年慶, 1999, 38-39頁)</p>
<p>政府は礼拝時に日本語を使用し、国歌斉唱から礼拝を開始することを要求してきた。戦争が激烈になると1944年7月全台教会の伝教師が台北の大直国民精神研修所における錬成に召集された。特に日本の南洋における敗北の様相が強まるにつれ、教会に対する懐疑の念は強まり、信徒の名簿を提出するように要求された。また米国による爆撃を避ける為に教会員が疎開したた</p>	<p>政府は礼拝時に日本語を使用し、国歌斉唱から礼拝を開始することを要求してきた。戦争が激烈になると1944年7月全台教会の伝教師が台北の大直国民精神研修所における錬成に召集された。特に日本の南洋における敗北の様相が強まるにつれ、教会に対する懐疑の念は強まり、信徒の名簿を提出するように要求された。また米国による爆撃を避ける為に教会員が疎開したた</p>
<p>嘉義</p>	<p>嘉義</p>
<p>嘉義 嘉義中会</p>	<p>嘉義中会</p>

							め教勢は大きな影響を受け、多くの地方教会は通常の集會ができなくなり、人数減少、教勢不振を招き、台湾教会の暗黒期、さらに中会の中の断期であった。 (基督教在台湾100週年紀念嘉中畫刊、1965、4頁)
7_01	嘉義	斗六教会	1884/ 5/ 1		漢族		伝道者： 黄武東 (1935-1944)， 黄主義 (1944-1945)。 1942年の時点で60周年記念の大伝道会と信徒靈修会を開いている。 (設教90週年特刊、1974、16頁)
7_02	嘉義	永光教会	1901/10/ 1			[設立は1957年。1901年は間違いと思われる]	
7_03	嘉義	西螺教会 耶穌聖教茄荖仔教会	1879/ 6/ 1				教会史誌未確認 伝道者： 林謹慎 (1936-1952) (「成立50週年紀念特刊」嘉義中会、1980)
7_04	嘉義	虎尾教会	1929/ 4/13			1929年 4 月13日、土庫教会より正式に虎尾が分設し、虎尾教会が誕生した。	教会史誌未確認 伝道者： 江嘉恩？ (19??-1952) (「成立50週年紀念特刊」嘉義中会、1980)

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

7_05	嘉義	土庫教会	1890/ 8/25					教会史誌に戦時期への言及なし。 伝道者：吳徳元 (1936-1940), 林朝坤 (1940-1941), 廖三炮 (1941-1949) (『成立50週年紀念特刊』嘉義中会, 1980)
7_06	嘉義	崙背教会	1900/ 1/ 1	1950/ 1/ 10			1900年、信徒の大多数が水尾庄に居住していたため、正式に水尾に教会を開設し会堂を建築して崙背寮教会と名付けた。西螺教会の支会として教会の事務の一切は西螺教会にお願いでいた。1908年1月12日鍾徳喜、李老王、鍾阿羅等が教会執事となり、その後李章先生が伝道師として就任し、信徒の牧会に当たった。1949年に江牧羊先生が着任した後、教勢は次第に進歩し、集会人数は増加。礼拝堂が老朽化したため崙背劇場を購入し、教会は水尾から崙背に移転した。	教会史誌未確認 伝道者：劉蜜 (1940-1949) (『成立50週年紀念特刊』嘉義中会, 1980)
7_07	嘉義	雲林東勢教会	1930/ 1/ 1	1960/ 1/ 1		東勢厝佈道所	最初は林本兄弟宅を礼拝堂として借用し、日曜学校も	教会史誌未確認 伝道者：謝碧 (1936-1938),

7_08 嘉義	北港教会	1911/12/11 1942/ 1/ 1	<p>その後、台南東門教会の許水、金漢、滙汪教会の鄧孝などの台南の信徒がこの土地で農業に従事するために移転して来た。1936年に信徒が増加したため、林助兄弟が2人の土地を捧げ、信徒が自力で会堂を建設し、それが今日の教会の所在地になっている。</p>	<p>王月朗 (1939), 李昆玉 (1940-1942), 潘明忠 (1944-1949) 1943-54年：大戦末期～光復初期は、時代が変化し、社会変動、不景気、極端な物資欠乏によって生活が極めて苦しく、教会の牧者を長老執事信徒が賢明に支えてくれた。 (「成立50週年紀念特刊」嘉義中会, 1980)</p>
			<p>1925年、南部大会は北港地区の宗教環境が特殊であることを鑑み、会堂建築のため募金を行い、イングラント宣教師会の補助と信徒の献金により、同年許頂長老の土地に会堂と宿舍を建築(即ち大同路の旧禮拜堂)、1942年に嘉義中会第十三次会での議決を経て本会は堂会に昇格した。</p> <p>1944年賴炳炯牧師起任当時第二次世界大戦の末期であり、台湾の情勢は非常に悪く、日本政府は教会に圧力を加えてきた。信者は皆真面目に主に信頼して道を守り、立派だった。 (「成立50週年紀念特刊」嘉義中会, 1980)</p>	<p>教会史誌未確認 伝道者： 謝再生 (1937-1939), 吳義勇 (1939-1941), 施溪川 (1941-1944), 賴炳炯 (1944-1956)</p>

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

7_09	嘉義 嘉義新港 教会	新港教会 1894/ 1/ 1		の人々との関係を用いて借用権を申請，現住民に譲ってほしいと交渉した結果，主の顧みのゆえに仏寺を教会堂として使用できるようになった。	伝道者： 蔡爾全 (1935-1938)， 謝再生 (1939-1948) 王采蘋 (謝再生夫人)「感言」 「カミダナ」事件」 (90週年紀念特刊，1984)→ <資料2⑧>
7_10	嘉義 過溝教会	嘉義東門教会 過溝支会 1897/ 1/10		1933年以降教勢が盛んになり，宿舍のスペースが足りなくなつたため，現在の禮拜堂を建替えてより長期の集會の用に耐えるようにした。この期間，故江旭，杜平および蘇食などの長老執事が常に奉仕し，會員皆，手となり足となり教会を支えた。	清朝時代には過溝庄には人口が多かったが，疫病が流行って多くが死亡したり別の地域に移転し，没落してしまつた。教会もまた著しく衰退し，経済的にも欠乏し，清朝統治末期には集會人數はほとんどなくなり，さらに第二次大戦終結前には，禮拜堂は日本軍によって強制的に医務所とさせられ，信徒の集會は長老であ
					教会史誌未確認 伝道者： 歐萬德 (1937-1956) (「成立50週年紀念特刊」嘉義中会，1980)

7_11	嘉義	下半年 教会	1889/ 1/ 1		<p>羅信の家で大戦後まで行われた。教会の経済状態が悪かったため、1940年、中会から中会直轄下に置かれることになった。</p> <p>1901年に下半年教会が成立。1917年に牛挑灣支会が成立、1945年1月日本基督教台灣教団下半年教会の名称に変更、1946年光復後、下半年基督教長老教会に変更。</p>	<p>教会史誌未確認</p>
7_12	嘉義	朴子教会	1899/ 8/22	1913/10/ 8	<p>聖堂完成後、1928年汪培英牧師を本教会第一任牧師として招聘。1931年7月27日に梁秀徳牧師の抜手式を挙行。</p>	<p>伝道者： 梁秀徳 (1931-1948) （『成立50週年紀念特刊』嘉義中会、1980） 1932年、朴子警防団本部に前面の土地を占拠され、1944年、日本人の徳山博信が東側の土地を強制的に軍庫として借り上げた。梁牧師の忍耐や呉長老の行政経験によって乗り切った。 （教会設教100週年紀念特刊、1999、4頁）</p>
7_13	嘉義	牛挑灣 教会	1885/ 6/23		<p>本教会は創設以来、福音伝道の熱情に満たされ、絶え間なく外に向かって拡張し、朴子、下半年、東後寮およびなし</p>	<p>教会史誌には戦時期への言及なし 伝道者： 潘金聲 (1938-1939)。</p>

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

7_14	嘉義	東後寮 教会	1917/ 8/29			<p>許徳謙 (1940), 鍾茂成 (1941-43), 施溪川 (1943-44), 楊信得 (1945) 貧しく教育程度も低い地域 （『成立50週年紀念特刊』嘉 義中会, 1980）</p> <p>教会史誌には戦時期への言 及なし</p> <p>伝道者： 莊清華 (1934-49) （『成立50週年紀念特刊』嘉 義中会, 1980）</p>
7_15	嘉義	嘉義東門 教会	1873/ 7/15		<p>伝道者： 鄭溪伴 (1931-1944), 黃武東 (1944-1950) 1941年12月17日の地震で甚 大な被害を受ける。1944年 4月、鄭溪伴牧師退任し、 黃武東牧師就任。同年戦火 が激しくなり市民は疎開を 命じられる。8月第一主日 より止むを得ず午後の礼拝 を停止。4月11日警察の命 命により防火線を設けた め小ホール、牧師館、日曜 学校講堂を解体し、ただ礼 拝堂のみが残された。しか し止むを得ず礼拝堂も台斗</p> <p>1937年に嘉義保育園（現在 の榮光幼稚園）を開設した。</p>	

7_16	嘉義	大林教会	1932/ 5/ 8	1951/ 1/ 1	<p>坑の蕭明源兄弟にお願いして解体したが、その解体工事費用は1000元、運搬費は650元、整地料金は400元であった。1945年4月8日から6月18日まで解体の関係で主日礼拝は停止。6月24日より毎主日午後4時より礼拝。第二次大戦が終結し、本教会建物の修繕費は5694元であった。</p> <p>(百年簡史, 1973, 50頁)</p> <p>教会史誌には戦時期への言及なし</p> <p>伝道者： 劉華義 (1935-1951) (「成立50週年紀念特刊」嘉義中会, 1980)</p>
7_17	嘉義	民雄教会	1911/ 1/ 1	1941/ 2/ 11	<p>1932年から1945年、創設以来10名の伝道者を迎えた。その中には李誠情伝道師、兵榮祥伝道師が各5年、その他短期の伝道者が就任した。伝道者が頻繁に交代するも教勢は盛んになり、歐壽其牧師が2度目の牧会に来た時には教勢は午前と午後の主日礼拝を合わせて100人前後、日曜学校の学</p> <p>教会史誌には戦時期への言及なし</p> <p>伝道者： 歐萬德 (1936-1938), 金連安 (1940-1940), 江嘉恩 (1940-1941), 周金耀 (1941-43), 林朝坤 (1843-44) (「成立50週年紀念特刊」嘉義中会, 1980)</p>

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

7_18	嘉義 鹿滿教会	1907/ 8/20	生は40人前後であった。 1931年2月教会員が購入した土地を整理し礼拝堂建築に取りかかろうとしたが、建築費が不足していた。 1934年3月、4中会の支援を受けて、新礼拝堂および宿舍の建築に取りかかった。1934年4月、礼拝堂建築が完了し、新礼拝堂に移転して、鹿麻産台湾基督長老教会の名称のもと、嘉義東門長老教会の支会集会を開始した。1947年に鹿滿基督長老教会と改称。	教会史誌未確認
7_19	嘉義 光華教会	1918/ 1/ 1	1934年9月5日に130円で「国語講習所」を購入、1947年の光復後、陳勇が捧げた土地(現在地)に、中会より26軒の教会からの寄付を得て、台湾元89400円で光華村30號に会堂を建築し、「台湾基督長老教会光華教会」と改称した。	教会史誌未確認
7_20	嘉義 水上教会	1926/ 9/ 1	1941年12月11日堂会に昇格。頼炳燭牧師を第一任牧師として招聘したが、同年大地震に遭い、教会の礼拝堂に亀裂が入り、兄弟姉妹	教会史誌未確認 伝道者： 蔡耿賢 (1935-1941)、 頼炳燭 (1941-), 兵明昌 (1942-44),

7_21	嘉義	青寮教會	1932/ 1/ 1	1951	<p>は皆礼拝堂の改築の必要を感じた。盧萬徳長老および陳坤源執事が再建にとりかかり、1942年12月木造礼拝堂の建築を開始、1943年1月に現住所に新会堂が落成し、総工程費用は日本円で3000円であった。これは第2回目の会堂建築である。</p> <p>1937年本教会信徒の阮受先生が青寮村39號の土地を会堂建築用地として捧げ、聖殿が同年完成し、聖殿献堂礼拝が挙行された。教勢も増加し、1945年第2回目の建堂事業がなされ、同年に完成した。</p>	<p>謝福元 (1944-48) (「成立50週年紀念特刊」嘉義中会, 1980)。</p>
7_22	嘉義	白河教會	1887/11/ 1		<p>教会史誌未確認</p> <p>伝道者： 施溪川 (1932-1938), 劉華義 (1938-1941), 陳光輝 (1941-47) (「成立50週年紀念特刊」嘉義中会, 1980)。</p>	
7_23	嘉義	岩前教會	1874/ 4/10	平埔族	<p>1937年に宋尚節博士が本教会にてリバイバル集会を奉行了した。1946年には陳降祥伝道師が小会信徒訓練会を開催するように要請、外部</p>	<p>教会史誌未確認</p> <p>伝道者： 劉蜜 (1937-1940), 陳降祥 (1940-46) (「成立50週年紀念特刊」嘉義中会, 1980)。</p>

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

7_24	嘉義	白水溪教会	1870/ 1/ 1			の牧師を招いてリバイバル伝道を行った。1954年には中会に申請して再び堂会に昇格、白水溪支会を分設した。	義中会, 1980)。
7_25	嘉義	關子嶺教会	1884/ 5/11	1926/ 1/ 1	平埔族	元々の礼拝堂は簡素な竹の作りであったが、1906年に土壁の建物に改築、1924年12月23日信徒が日本円で5000円を石造の会堂建築のために献金、1930年に大地震で教堂が損壊した後、1931年10月に再建し、現在の礼拝堂となった。	教会史誌未確認 教会史誌には戦時期への言及なし 伝道者： 林朝暉(1935-1940), 夏禹(1940-41), 吳義勇(1941-42), 李識情(1943-1955) 〔「成立50週年紀念特刊」嘉義中会, 1980)。
7_26	嘉義	東河教会	1871/ 1/ 1	2005/ 7/12	平埔族 シラヤ族	1932年2月7日に会堂が完成し開設礼典が奉行された。林謹慎牧師が鹽水支会の副牧および新營支会の駐在牧師となって、牧会を担当し所を開設し、幼児に対する宗教教育を通して神を知ることを教えた。1941年2月、新營教会の教勢が増加し、成人会員が67名となったた	教会史誌未確認
7_27	嘉義	新營教会	1932/ 3/17	1941/ 2/ 1			教会史誌未確認 伝道者： 鍾茂成(1937-1941), 蔡耿賢(1941-52) 〔「成立50週年紀念特刊」嘉義中会, 1980)。

7_28	嘉義	鹽水教會		1901/ 3/12				め、中会に申請し堂会に昇格した。	教会史誌には戦時期への言及なし
8_01	台南	太平洋馬雅各紀念教會	亭仔腳礼拝堂	1865/ 6/16	1878/ 6/ 8	漢族			蘇錫鐘「近代史第一(1936-1945)」(太平洋教会誌教110年史, 1985, 287頁)→<資料2⑨>
8_02	台南	東門巴克礼紀念教會		1903/5/1	1906/6/12	漢族		本教会は97年の間に、全部で7軒の教会を分設した。最も早くに分設したのは1933年、30週年記念に「高砂町佈道所」(即南門教会)である。1936年、朱尚節博士が伝道に来た際には福音伝道が盛んになり「後壁厝佈道所」(即仁徳教会)が分設された。	伝道者： 潘道榮(1936-1940)、 陳能通(伝道師1940-) 楊士養(1941-48) 門巴克礼紀念教会90春秋紀念特刊, 1983)→<資料2⑩>
8_03	台南	看西街教會		1865/ 6/16	1943/ 4/ 1	漢族		1939年3月18日永樂教会として支会が成立、61年を経た。1943年3月末に引退牧師の盧賞が本教会に派遣され、同年4月に堂会が成立、会員59名であった。	伝道者：盧賞(1943-) 憶主僕盧賞牧師 義人的畫像 (看西街教会獻堂典禮, 1955)
8_04	台南	灣裡教會		1932/ 6/23	1979/ 1/23			本教会の創設は1932年6月23日で、台湾基督教會灣裡伝道所(母会は太平洋教会)として成立した。	教会史誌未確認

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

8_05	台南	安平教会		1898/ 2/19	漢族	1932年9月17日信徒の張鴻圖が所有していた土地(現在の教会住所)に1棟の木造平屋の礼拝堂を建築した。主の恵みに感謝すること、張鴻圖は神の愛に感動して、喜んでこの土地の全部を教会に捧げ、その時から安平教会はこの土地を所有することになったのである。	教会史誌未確認
8_06	台南	安順教会	安順寮教会→ 總頭寮長老教会→安順長老	1901/ 1/ 1	1939/ 1/ 1	1940年に周榮安を第一任駐堂牧師として招聘。1946年に廖問淑を第二任牧師として招聘。主の祝福により信徒数は大きく増え、教勢は盛んになった。	教会史誌未確認
8_07	台南	隆田教会		1876/ 6/ 6	漢族・ 平埔族?		戦時期に関する言及なし
8_08	台南	麻豆教会		1891/ 2/ 1	平埔族・ 漢族?	1934年に教会は経済的な独立を果たし、王守勇牧師を第一任の牧師として招聘した。1940年に会堂は現在の住所に移転し、同年獻堂すると共に邱天登牧師を第二任牧師として招聘した。	教会史誌未確認
8_09	台南	佳里教会	蕭壟教会 Soulangh	1899/ 2/ 1	平埔族	1920年蕭壟は佳里に改称し、教会名称も佳里基督長老教会となった。1924年に	伝道者：陳瓊瑤(1928) 1944：日本政府が強制的に 教会の土地を派出所

8_10	台南	学甲教会	1906/ 1/ 1	1940/ 2/ 2	<p>廖得牧师を第一任駐堂牧师として招聘した。当時の礼拝出席人数は約150人であった。</p> <p>1944年日本政府が教会の旧礼拝堂を派出所として使用することになったため、8月に教会は中山路158號現址に移転した。</p> <p>1945年に米軍が台湾を空襲した際、礼拝堂の一部と牧師館が爆撃に遭い、會議記録資料の大部分が焼失してしまっ</p>	<p>として使用することになり、8月に礼拝堂は中山路に移転</p> <p>1945：米軍爆撃によって礼拝堂の一部と牧師館が焼かれ、會議記録と歴史資料の大部分を焼失。</p> <p>1946：無牧期間に信徒は四散し、集会人数が数十名にまで減少。(105週年紀念特刊、29-32頁)→<資料2①></p>
8_11	台南	六甲教会	1931/ 4/ 1	1963/ 1/ 1	<p>1938年に林徳修執事が上海に居を定めて移転した際に、所有する家屋と土地を市場価値の半値以下で教会に提供したため、信徒は熱心に献金をして現在の土地を購入したのである。</p>	<p>戦時期に関する言及なし</p>
8_12	台南	善化教会	1896/11/ 8	1929/ 3/ 1	<p>1930年7月2日本庄の陳金榜と李元盛の2名の信徒が善化教会の伝道師趙超先生と相談し、台南中会の女性宣教会と台南神学院の助け</p>	<p>戦時期に関する言及なし</p>
8_13	台南	大内教会	1930/ 7/ 2			<p>教会史誌未確認</p>

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

8_14	台南	頭社教会		1870/ 2/ 1		漢族・平埔族？	を得て説教所「大内台湾基督長老教会説教所」を開設した。これは善化教会の支会で、後に蕭朝金先生を第一任伝道師として招聘した。1928年には信徒数が大きく増えたため煉瓦建ての礼拝堂を建築した。	教会史誌未確認
8_15	台南	新市教会	大目降	1897/ 1/15	1934/ 4/ 8	平埔族	1934年4月8日中に会許可を得て新市堂会に昇格、教会これより1960年まで29年の長きに渡って続いた。	教会史誌未確認
8_16	台南	左鎮教会	拔馬	1870/ 4/ 1	1903/ 1/ 1	平埔族	[教会簡史は非常に長い、主に平埔族のルーツに関するもので戦前の具体的な年号などは出ていない]	伝道者： 周榮安、黄云、李明意など。 1931年以降夏期子ども向けに白話字教育をする。[戦時期への言及一切なし。] (設教百週年、1970)
8_17	台南	岡林教会	崗仔林？	1867/ 1/ 1		平埔族	1930年9月21日に聖歌隊を組織。1932年11月13日に青年会を組織し、穆水龍を会長に任命。1937年6月5日に佈道会を組織。1946年3月17日に会堂をふたたび建築し、第3回の獻堂典礼を挙行する共に、住所を宅仔内門に変更した。	教会史誌未確認
8_18	台南	澄山教会	大寮→阿殼坑 →山豹	1896/ 9/ 3		平埔族		教会史誌未確認

8_19	台南	玉井教会	「玉井支会」 (礁吧咩礼拝堂)	1903/ 4/ 1 - 1930/ 3/ 6	平埔族	<p>本教会の住所は4度も変わっている。1896年は大寮、1908年は廻聲坑、1915年は山豹、そして1945年は澄山で、集会地点は移り変わっても、感謝することに相は我々に安定した場所を与え続け、今日でも集会を継続できている。</p> <p>【いわゆる「礁吧咩(タバニ)事件」発生地】 玉井支会が堂会に昇格したのはおそらく1929年末または1930年初めのことである(頭社母会の小会記録より)。1929年10月26日の小会では玉井支会が堂会昇格を申し込んでおり、1930年5月11日の小会では玉井支会の昇格は既に中会で承認されていた。この時の信徒はおそらく90戸ほどで、しかし山間部の農村教会であったため交通は不便で、経済状態も常に悪かった。礼拝堂移転後に「三間厝」を新たに改修し、正式な「三間店」として商人に貸し出した。</p>
教会史誌未確認						

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

8_20	台南	南化教会	1941/ 1/ 1	平埔族	<p>1934年には積極的に禮拜堂と小建物の建替えを検討し始め、1935年に建堂を継続、今ある古い石造りの禮拜堂と木造の牧師館、既に遣われていない煉瓦作りの便所はいずれも1937年に竣工されたものである。</p> <p>1956年10月18日には豊里部落(口宵厝)に伝道所の分設を申請した。</p>	<p>1936年に高雄縣内の門郷に木柵教会の信徒が伝道に入った。当時は日曜日には皆木柵、玉井、岡林教会の集會に集っていたが、日本時代に入って種種の困難が信徒の靈性を低迷させていた。</p> <p>1941年には永康教会の李傳牧師と陳大鏞長老、陳網長老などが伝道所開設を励まし、南化信徒の戴楨、王啟順、郭朝班、李連英らが協力して支援、夏禹伝道師が第一任伝道師として招聘された。1941年5月17日第一回小会にて荐鄂朝班与李連英を長老に、王連福、王茂丁、王陳瓊花、力丁旺の4</p>	<p>教会史誌未確認</p>
------	----	------	------------	-----	---	---	----------------

8_21	台南	歸仁教会	關帝廟支会, 香果宅支会, 紅瓦厝禮拜堂, 歸仁北支会	1906/ 9/10		<p>名を執事に推薦，しかし1942年末に夏禹伝道師は辞職して澎湖に戻ったため，伝道所の集会は停止になった。</p> <p>1942年に木柵教会信徒と台南中会とが伝道所を再開するよう励ますと，信徒は集會に再び集うようになった。しかし1945年に再び伝道所の集會を停止した。</p>	戦時期に関する言及なし
8_22	台南	永康教会		1894/11/15	1939/12/24	<p>1935年に現在の住所に新しい禮拜堂を建設し，中会の建築部および母会の有志などの支援を受け3700余円を得て同年6月1日に竣工した。当時の牧会者は陳朝明伝道師であった。</p>	<p>小さい建物の扉と窓の鉄格子部分を供出させられた。(110週年記念特刊，2004，14頁)</p>
8_23	台南	大灣教会		1893/ 5/ 1	1949/ 1/ 1	<p>1933年，楊梅女性伝道師が牧会していた際，信徒の張媽考医師の励ましを受け，また張江海と季筆が合わせて土地を捧げたため，現住所（東灣村181號）に禮拜堂を建築することができた。</p>	<p>教会史誌未確認</p>

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

8_24	台南	新化教会	大日降、紅磚瓦礼拝堂	1915/ 1/ 1		平埔族	1922年5月に第一代の赤煉瓦礼拝堂が落成。この時より教勢は日増しに盛んになった。	教会史誌未確認
8_25	台南	新和教会	新化街講義所	1878/ 5/ 1	1923/ 3/20		1933年2月27日に礼拝堂を改修し、同年5月28日に献堂礼典を挙行。	教会史誌未確認
8_26	台南	仁徳教会	後壁厝村	1936/10/ 1			宋尚節博士によるリバイバル伝道によって信徒は非常に励まされ、伝道所を設立する必要を強く感じるようになった。 1936年10月の第一主日、母会の東門教会が正式に後壁厝村の許奢医師宅にて伝道所の集会礼拝を初めて行い、五年の歳月を経て、西隣りの民家を借りて集会場とするようになった。さらに3年後、その建築物が老朽化して使用に耐えなくなつたため、再び許奢医師宅を礼拝に使用することを議決し、6年間その状態が続いた。	教会史誌未確認
8_27	台南	中洲教会	中洲支会	1909/ 1/25	1953/ 1/ 1		1935年の教会員は大潭、中洲、部籍厝(現在の武東)、車路統、鴨母寮、三甲子な	教会史誌未確認

9_01	高雄 前金教会	前金佈道所, 荖雅集会所	1938/ 3/12	1941/ 2/12	<p>どから来ており、合わせて49戸であった。許益超伝道師の任期中に二つの大事件が起こった。一つ目は1944年に本会の分設支会がある路竹教会(現高雄中会)が成立したことである。二つ目は1947年に許伝道師と親しい信徒が車路坵に独立教会を建てたことで、教会員15戸がそちらに移り、教会信徒数が激減したことである。</p> <p>本教会の始まりは1938年3月12日に廖得牧師、彭清約長老、林程長老などが信徒を集めて家庭集会を始めたことで、これが前金伝道所になった。後に集會人数が倍増したため集會地点を変更する必要が生じ、1941年に高雄中会に申請して堂会へ昇格し、荖雅集会所となった。同年5月25日に第一回目の聖餐典礼が挙行され、陪餐者は50名であった。1942年に李幫助長老が大陸から台湾に戻って来て、本教会の伝道の働きを担っ</p>	<p>教会史誌未確認</p>
------	------------	-----------------	------------	------------	---	----------------

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

9_02	高雄 鹽埕教会	高雄 鹽埕教会	<p>1923/ 2/18</p> <p>1931/ 3/ 1</p>	<p>鹽埕埔設佈道所, 鳳山基督教會, 高雄講義所, 高雄市北野町高雄基督教會</p>	<p>1926年7月4日に鹽埕区新興街118號に移転し, 會堂建築に取りかかり, 1930年5月20日に獻堂礼典を挙行した。1931年3月に堂會に昇格, 当時の名称は「高雄市北野町高雄基督教會」であった。第二次大戰終結後, 高雄市の人口は激増し, 北野町の旧會堂は狭すぎたためについて現在の住所に移転し, 旧會堂は福音會が購入した。</p>	<p>翌年台湾總督府は戦時期の時局のために一切の集會を嚴禁し, 教會は活動停止を余儀なくされた。1945年に戦争が終結, 同年10月7日に信徒らは林啟三先生の客間で集會を開始し, 廖得牧師に依頼して行った第一回の聖餐時は陪餐者27名が参加した。</p>	<p>伝道者： 李乘鰲 (1933-) 戦争末期に礼拝堂と小ホールはすべて爆撃で損壊し, 終戦後に李牧師が全部修繕した。 (50週年紀念特刊, 1973, 4頁) ・第二次世界大戰の際, 高雄市は全市が米軍による爆撃に遭い, 全市民が田舎や山間部に避難, 疎開せざるを得ず, 集會は一度中止になった(34頁) ・しかし非常に幸運なことに北野町は爆撃を受けず, 礼拝堂と小ホールも修繕を経てまた集會に使用することができるようにな</p>
------	------------	------------	-------------------------------------	---	--	--	---

							<p>った(35頁) ・空襲によって会堂屋根の頂が損傷した(38頁)</p>
9_03	高雄	旗後教会	打狗礼拝堂	1865/ 5/28	1932/ 2/17	漢族	<p>1931年2月17日に堂会に昇格。1933年4月3日愛国園の開園礼典挙行、1935年バークレイ牧師が現住所に新会堂を建設。堂会に昇格。初代長老の王江長老は壁を修繕中に煉瓦で頭を怪我して主に召された。</p> <p>1943年：許水露牧師がスパイ容疑で捕えられ拘禁される。 1944-1945年：戦争が激烈になり教会所在地も疎開を余儀なくされる(100周年記念冊、1965、6頁)</p>
9_04	高雄	楠梓教会	耶穌安息堂、 耶穌教堂	1872/ 1/ 1			<p>戦時期に関する言及なし</p>
9_05	高雄	岡山教会	楠梓教会阿公 店支会	1911/ 1/11	1921/ 1/24	漢族	<p>伝道者： 許崑(1927-1940)、 蕭朝金(1940-1947) 第二次大戦期間は経済上物質上の欠乏を感じたが蕭牧師は神に栄光を帰す精神でたゆまず努力を続け、本教会を大戦中も維持し、主を愛し人を愛する心は見上げたものだった。 (60周年記念特刊、1971、2頁)</p>
9_06	高雄	阿蓮教会		1934/ 8/ 1	1958/ 7/ 1		<p>1935年5月25日献堂。1942年1月日本統治当局の命令により中路教会に組み込まれる。</p> <p>教会史誌未確認</p>

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

9_07	高雄	中路教会	大甲？	1899/ 9/28	1904/ 1/ 1	1937年から1945年の間、日本軍警察の迫害により教会が以前から有していた資料の一部が焼却され、本教会は50年の歴史上、最大の傷を受けた。	教会史誌未確認
9_08	高雄	海埔教会	大甲？	1910/ 1/ 1	1936/ 2/ 2	1936年、李徳結伝道師の任期中に旧礼拝堂の改築が開始し翌年に完成。1942年4月14日に按手式および牧師式に堂会に昇格し、「林園教会」と改称した。潘聰傑牧師の任期中に信徒数が増加し旧礼拝堂が手狭になり、うるさい環境でもあったことから、小会で礼拝堂を現在の住所に移転することを議決した。	教会史誌未確認
9_09	高雄	林園教会	林子邊教会	1927/11/22			教会史誌未確認
9_10	高雄	大樹教会		1935/ 1/26		1935年1月26日店舗を借用して正式に講義所とすることを決定した。1935年10月1日に献堂したが、信徒が増加したので続けて家屋を購入し、将来の建堂のために用いることとした。	教会史誌未確認
9_11	高雄	旗山教会		1912/ 6/14			伝道者：張明道 (1933-48) 「第二次世界大戦が始まり、

9_11	高雄	旗山教会	1912/ 6/14				<p>教会の仕事は減少した。米軍機が旗山の製糖工場を爆撃し、旗山街を掃射した。ある者は疎開しある者は防空壕に逃げ込んだ。牧師は弾箱を山に開けた穴に運搬する仕事に動員され、牧師夫人は圓潭の飛行場建設に動員された。近くの教会は馬の飼料庫になり、非常に多くの教会が集会を停止した。幸いなことに旗山礼拝堂は郡役所が救護所として借用したので、光復に至るまでの毎週日曜日午前中、安んじて礼拝を継続することができた。光復後、私は旗山教会を辞して旗後の牧会に移った。」 (張明道回想、60周年記念、1971、22頁)</p>
9_12	高雄	老濃教会	1902/ 1/12			[旗山教会の支会]	
9_13	高雄	永興教会	1871/ 1/ 1	1946/12/ 1	平埔族		<p>1935年に礼拝堂が雨漏りした。当時の政府は部落ごとに派出所を設置していたが、周囲に誰も住んでいない山頂にあったため、派出所の近くに教会を建設する</p>

教会史誌未確認

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

9_14	高雄 (澎湖)	馬公教会	1886/ 6/ 6	漢族	<p>ように要請された。ちようと郭という人物が教会に土地を売却したので、中会建築部長の吳可免長老の設計により1937年現在の住所に完成した礼拝堂に移転したのである。1947年、穆才旺伝道の任期中に永興教会と改称した。</p> <p>1942年は王衛牧師が本会の駐堂牧師として派遣され、その任期中に教会を堂の地位まで戻そうと努力した。</p>	<p>伝道者： 頼仁聲 (鐵羊1937-1944)， 潘金生 (金田吉盛1944)</p> <p>1942年，太平洋戦争のため教会は集会を続けることができなくなった。暫定的に馬公文澳の李清義長老宅を臨時の集会所とした。頼牧師は7年間戦時期のあらゆる苦難を経験した後に離任した。</p> <p>(115週年紀念特刊，2001，4頁)</p>	教会史誌未確認
9_15	高雄 (澎湖)	西嶼教会	1886/ 6/12				

9_16	高雄 (澎湖)	竹篙灣※ 教会	1886/ 6/12	關閉或轉出		教会史誌未確認
9_17	高雄 (澎湖)	花宅教会	1906/10/ 1	關閉或轉出	1914年に簡素な集会所を建築。1938年に宋博士が台湾でリバイバル伝道を行った際に現場で行われた募金により当時の日本円で410円が集まり礼拝堂に改築することができた。	教会史誌未確認
9_18	高雄 (澎湖)	七美教会	1920/11/ 1		福音堂	教会史誌未確認
9_19	高雄 (澎湖)	白沙教会	1887/ 2/10	1983/ 1/ 1	頂山教会 瓦礫教会	戦時期に関する言及なし
10_01	壽山	舊城教会	1904/ 1/ 3	1931/ 2/17	碑仔頭街	教会史誌未確認
10_02	壽山	新興教会	1938/ 3/12	1941/ 1/ 1	峇雅寮堂会?	教会史誌未確認

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

10_03 壽山	鳳山教会 埤頭	1867/ 4/26	漢族	<p>ばならず、不便だと感じる者もあつた。当時、廖得牧師、彭清約長老、林程長老は時は熟し収穫の時になつたと考え、同信の兄弟姉妹を集めて家庭集会を開始した。ところが教会が成長し始めたその時、致命的な打撃を受けたのは、第二次世界大戦の戦火が激烈になり、政府が教会信徒の集会を許可せず、高雄市民に疎開を命じたことである。そのため1943年末から45年9月までの1年9ヶ月の間、信徒らはそれぞれ別々のところに疎開し避難した。1946年5月5日、峇雅寮堂会は新興区の彭清約長老宅で集会を開始し、新興教会と名前を改めた。</p>	<p>伝道者： 吳德元 (1937-1938)、 洪萬成 (1938-1944)、 郭東榮 (1944-1949) 「愛英美事件」 「信徒坐獄」 「台湾光復」→<資料2 ②> 洪萬成「愛英美事件的回憶」 未翻訳</p>
----------	------------	------------	----	--	---

10_04	壽山	木柵教会	1868/12/16	平埔族	<p>行われた家庭集会で、信徒は精神的打撃や物質的な欠乏に対する慰めを主からいただくことができた。主の恵みにより1945年8月15日、日本は投降し、疎開していた信徒もぞくぞくと戻って来て、教勢は速やかに回復していった。帰って来た当初の彭林芳長老は会堂の損失が甚だしいことを見て、主を愛する気持ちから独力で会堂を修繕し、神を崇めた。さらに教会員たちが一緒に協力して礼拝堂の裏庭にあるフェンスを作ったり、礼拝堂の講壇や祈禱室を作ったりした。</p>	<p>郭東榮「難忘的時代」 未翻訳 「回憶第二次世界大戰中鳳山教会迫害史」 未翻訳 (鳳山教会100週年特刊, 1967, 5-6頁, 43-55頁)</p>
10_05	壽山	大林蒲教会	1930/ 6/15	1949/ 1/ 1	<p>最初は魏進忠先生のお宅で礼拝をしていたが、1929年当時の集會人数は約9名で、翌年6月15日には陳風苔医師宅で礼拝を行うようになった。それでこの日を教会の開設日に定めていた。その頃は困難はあったが主の恵みのうちに導かれ、教会は日増しに成長し</p>	<p>教会史誌未確認 教会史誌未確認</p>

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

11_01	屏東	屏東教会	阿猴	1871/ 2/10			<p>1914年に吳希榮が屏東教会の第一任牧師に就任、信徒数は700人を超え、吳牧師の家族事業である「仁安堂」からの献金により桶仔樹腳(現住所)に1200坪の土地を購入、28,000元を集めて現在も使用している会堂を建築した。当時は第一次世界大戦中で、建堂工程は極めて困難であったが、教会員は一つの心で協力し、計画を完遂することができた。「重新得力再出發一屏東教会」PCTウェブサイトを</p>	<p>いていった。</p>	<p>教会史誌未確認 伝道者：許有才</p> <p>日本時代、教会は大きな圧迫を受け、第二次世界大戦になると台湾同胞は日本政府によって殊更に不自由な生活を強いられたのみならず、精神的にも統治され、「皇民」として日本をつくった「天照大神」を拝み、「外国の神」は拜んではならないとされた。我々の礼拝集会は常に日本の「高等刑事」あるいは憲兵が監視するところなり、しまいに集会を持つことができなくなり、キリスト教徒は宗教信仰の自由を失った。これは悪魔による悪い試練であって、教勢は一時的に下がったが、この暗黒期が長く続かなかったのは幸いであつた。</p> <p>(百週年史典, 1970, 34-35頁)</p>
11_02	屏東	里港教会	阿里港教会	1867/ 5/20			<p>平埔族</p>	<p>教会史誌未確認</p>	
11_03	屏東	内埔教会 (客家)		1898/ 5/ 1			<p>客家</p>	<p>教会史誌未確認 伝道者：</p> <p>1937年は教会は無牧で、当時の長執が中心になって新</p>	

						会堂を建設した。40周年のお祝いの時に中日戦争が勃発したため、慶祝式典や献堂式を挙行することができなかつた。光復後は教会の向かいに劇場が建てられ、都市計画によって教会環境が激変して賑やかな場所になり、静かに礼拝を守ることが難しくなってしまった。	方廣生 (1939-1953) (屏東中会10周年紀念集, 1975)
11_04	屏東	中林教会	1875/ 5/ 5	2002/ 9/ 9	平埔族(馬卡道族)・客家	1895年日本軍が台湾にやって来た時、教会は評判が良いためとして十字架を持って街次大戦期間中、米軍の飛行機は空襲時に教会堂の十字架は避けて爆撃した。	教会史誌未確認
11_05	屏東	老婢教会	1877/ 1/ 1	關閉或轉出			教会史誌未確認
11_06	屏東	萬丹教会	1896/ 1/ 1				伝道者： 高篤行 (1919-1938)、 李德結 (1938-1939)、 歐進安 (1939-1957) (100週年紀念特刊, 1996)
11_07	屏東	潮州教会	1884/ 1/ 1	1896/ 1/ 1		(websiteに記載なし)	教会史誌未確認 伝道者： 方廣生、黃東識 1935年に幼稚園を開園し、第二次世界大戦末期に空襲

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

11_08	屏東	南州教会	1924/ 3/ 9	1927/ 3/ 1	(websiteに記載なし)	<p>が激しくなくなった時代に停止せざるを得なくなるまで続けられた。黄東謙牧師は日本統治末期から光復当初までの種々の困難を良く乗り切ってくれた。 (屏東中会10週年紀念集, 1975)</p> <p>教会史誌未確認 伝道者： 張純恩 (1936—1945) 1941年恆春教会より本教会の支会にしてほしいとの要請があったため、羅約伯牧師に駐在してもらった。しかし1943年には太平洋戦争のため教会経済が立ち行かなくなり、恆春支会を放棄せざるを得なくなった。 (屏東中会10週年紀念集, 1975)</p>
11_09	屏東	竹仔腳教会	1871/ 1/ 1		(websiteに記載なし)→ <教会史誌参照>	<p>伝道者： 高金聲 (1937-39), 阮德輝 (1940-47) 年代簡史より 1942. 8. 2 阮德輝牧師は台北の教師錬成会に赴くよう大会から通達があったことを報告。</p>

11_10	屏東	東港教会	1867/11/ 1	1896/ 1/ 1	<p>(上帝親自預備的教会—東港教会PC(T)ウェブサイトを1920年に赤煉瓦の礼拝堂を竣工。旧礼拝堂を日曜学校および幼稚園の教室として使用。24年後の1944年、第二次世界大戦期、同盟軍の空襲に遭って屋根と壁が損傷。戦争終結後、空襲で四方に疎開したり軍人として応召されていた者たちなど、戻ってきた長老執事信徒たちと、戦後牧師として招聘された東港中学教頭を兼任していた劉淇水牧師とが、心を合わせて損傷した礼拝堂を修復し礼拝を再開するこ</p>	<p>1943. 6. 6 時局を鑑み教会より30元の国防献金を行う。 1945. 9. 9 久しく軍部に占拠されていた礼拝堂が返還され、次週主日清掃および食事で祝う計画。 1945.11. 4 礼拝堂を日本軍が占拠していた13ヶ月分の140.40元を収入として受け取る。 (130週年紀念, 2000, 39-40頁)</p>
					<p>伝道者： 阮連徳 (1936-38), 方降生 (1938-1939), 高約拿 (1939), 吳徳元 (1940), 陽信得 (1942), 劉淇水 (1943-46) 戦時期に関しては左に同じ文章を記載 +1943年戦争が激しくなつた為に幼稚園を休園 (130週年紀念特刊, 1997)</p>	

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

11_11	屏東	琉球教会		1880/ 3/10	1896/ 1/ 1		とができた。
11_12	屏東	鹽洲教会 鹽埔仔教会		1871/ 1/ 1	1896/ 1/ 1		(website)に記載なし
11_13	屏東	水底寮 教会		1934/ 4/20	1952/ 5/20		(website)に記載なし
11_14	屏東	恆春教会		1913/ 1/ 1			教会史誌未確認 1945年：第二次世界大戦、同盟軍による爆撃のため教会は廃墟と化した。そのため信徒は暫くの間、黄讚黄長老宅にて礼拝を行い、1950年によりやく本教会で再び礼拝ができるようになった。 (屏東中会10週年紀念集、1975)
	太魯閣 中会	克尼布 教会		1934/ 1/ 1		タロコ族	(website)に記載なし
		谷牧紀念 教会	崇徳教会	1946/ 1/ 1		タロコ族	教会史誌未確認
							1931年前後、チワン女史は花蓮の山地各村落で福音伝道を開始したが、本村落でも秘密裏に家々で伝道していた。最初に入信した周玉葉、周岡市、周阿有、宋姜女、周源裕、李文山などの人々は親戚や友人たちにイエスを紹介していった。

	<p>姫望記念 教会</p>		<p>1938年、主を信じる者が増加したので警察が信徒を迫害するようになり、しよっちゅう叩かれ、刑罰として労働に従事させられた。しかし叩かれれば叩かれるほど死に至るまで主に忠実に従う信仰が強まり、集会が絶え間なく秘密裏に行われ、信徒数も50名をくだらなかつた。</p>
	<p>芝苑記念教会</p>	<p>1946/10/ 1</p>	<p>1930年、原住民の信仰の母チワン女史は本村落で秘密裏に知人友人に対する福音伝道を開始した。本村落で最初に主を信じたのは陳三良長老および夫人そして親戚数名である。1931年より秘密の場所に集まって一緒に日本語の聖書を読み始めた。警察が信徒を迫害し始めたので同じ場所での集会はできず、しばしば岩山の洞穴の中に集まった。1948年より警察がすべての信徒を叩き始め、刑罰として労働に従事させたが、信徒は信仰を堅く保ち、さらに</p>

教会史誌未確認

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

			<p>熱心に主に従ったので、逆に信徒数は増加した。1945年に第二次世界大戦が終結したとき、信徒数は既に100名以上あり、ただちに弓木で集会所を作り、その後の短い期間で二度教会堂を改修した。</p>	<p>本部落に福音が伝わったのは1939年にチワン女士が柳美花の家を訪問、彼女とその知人にイエスを紹介したときである。村民は彼女に對して、早くここから出て行かないと刀または弓矢で殺すと脅した。しかし福音のメッセージは人の力で消し去ることはできない。聖霊は柳美花の人々の心を開かせ、父母そして一家全員が主を信じた。</p> <p>1946年には玉山神学院の第一期の学生全員がこの村で伝道会を挙行し、その後学生がグループに分かれて一家族ずつ訪問伝道をした。</p> <p>1946年に田道武先生が主を救主として受け入れ、あらゆる悪習慣を極い改めて熟</p>
				<p>タロコ族</p>
				<p>陶模閣 教会</p>
				<p>1947/ 1/ 1</p> <p>民有教会</p>
				<p>教会史誌未確認</p>

						心なキリスト教徒になつた。自分の土地を集会所建設のために提供し、何度も集会所を修繕した。	教会史誌未確認
	威朗記念教会	水源基督長老教会	1945/ 5/24			他の原住民教会と類似する敘述。	教会史誌未確認
	銅門教会		1945/12/ 1		タロコ族	1943年、村に嫁いできたクリスチャン女性を通してキリスト教がひろまった。	教会史誌未確認
	文蘭教会		1945/ 2/ 1		タロコ族	1944年、豊田村の劉富昌先生宅にて集會開始。	教会史誌未確認
	見晴教会		1946/12/20		タロコ族	記述	教会史誌未確認
	明利教会	大觀講義所 (屬於鳳林長老教会)	1945/12/ 1	1964/ 7/ 1	タロコ族	1939年水源村から嫁いできた女性とその夫が福音を伝える。大戦終結時の信徒数30名以上。	教会史誌未確認
	崙太教会	「崙山講義所」, 屬於玉里教会 →「崙山太魯閣教会」	1945/ 2/ 4		タロコ族	大戦終結後、160名の信徒。	教会史誌未確認
	馬太敏教会		1945/ 1/ 1	1953/ 6/27	タロコ族	1934年淡水学堂「北部神学校」を卒業した許南(Afang)伝道師は北部大会より鳳林郡上大和(現今之光復郷)の開拓伝道に派遣された。最初は漢族を対象として伝道していたが、3	教会史誌未確認

年後に2人の盲人と一人の跛の3人のアミ族が主を信じた馬鞍部落最初の果実となった。その後、2人の盲人のうちの1人がその妹である曾玉蘭(Linga'oping)を信仰に導き、薦められて1936年淡水婦女学堂に入學した。18歳で嫁に入った女性でありながら、2年間の学びの後に帰郷し、許南免のもっとも能力ある助手になったのである。その頃日本の警察はアミ族がキリスト教を信じることを許可せず、あらゆるところで監視と迫害を行ったので、アミ族は秘密集会を行うしかなく、許南免は日本警察の迫害を逃れる為に上大和地区を離れて玉里萬寧山区に隠れ住んだ。第二次大戦終結前までに上大和地区で主を信じたアミ族は50余名いた。

(注記) 本一覧表は筆者による教会史誌調査の中間報告とでもいうべきものであり、未確認の教会史誌も多く中文からの翻訳も粗訳にすぎないことから、あくまでも戦時期台湾のキリスト教徒および教会の経験を理解するための参考資料あるいは手がかりとしてののみ参照されるべきものである。データとしての正確性は追求されていないことを了解いただきたい。また、この一覧を作成するにあたって参照した教会史誌一覧については、「参照教会史誌一覧」を参照のこと。

資料2：各個教会史誌に記載されている戦時期前後の叙述（長文資料、抜粋）

- ① 鍾仁心（高雄莊牧師夫人）「我的感言」（『花蓮港教會 80 週年紀念特刊』1987 年，33-34 頁）より

・・・日米大戦勃発以降，各家庭，各教会に神棚が配布された。原住民信者が牧師への相談事や祈りに来るのは真夜中から早朝 5 時の間だった。1940 年 4 月 25 日，牧師に赤紙が来た。・・・身体検査に赴くと，検査に当たった日本人軍医は牧師の経歴を見て「このような人材が中国大陸の軍夫になるのは国家の損失だ」と言い，健康だったにもかかわらず不出征となった。このような神の奇しき導きによって礼拝堂の改築を終わらせることができたのである。

しかし牧師はスパイ容疑をかけられて刑事に日夜監視される生活が 4 年半続き，肉体的精神的な打撃から日夜絶え間なく頭痛に悩まされるようになった。父母兄弟，親しい友人たちの勧めで台南の竹田病院に入院したものの，数日間経過を見るも効果がなく，1944 年 9 月に亡くなった。

- ② 「蘇慶輝牧師對新店教會的回憶」（『新店教會聖殿改建獻堂紀念冊』2010 年，130-134 頁）より [蘇慶輝：両親が戦時中に新店教会執事]

当時の政府は台湾人を皇民化しようと非常時の手段をもって日本語推進，台湾語禁止，国語家庭の優遇，神社参拝の義務化を実施，キリスト教徒も強制的に神社参拝に連れて行かれた。キリスト教が皇民化運動の障害になると考えた政府は，教会に圧力を加え，礼拝の前に国民儀礼，国歌斉唱，宮城遥拝を礼拝前に行うことを義務づけた。さらに進んで神棚設置を要求し，官吏は神社や神棚は宗教とはまったく関係ないと説明した。キリスト教徒は礼拝堂に神棚を設置することに非常に抵抗した。なぜなら「創造主以外の何者をも拝んではならない」との信仰に背くことだったからである。後に礼拝堂に神棚を設置することに反対した牧師や長老が相次いで投獄されたため，止むを得ず新店教会の牧師と長老とで話し合い，牧師館に適当に神棚を設置することで政府の目をかわそうとした。

これは本当に仕方ない決定だった。第二次世界大戦が勃発し，日本と英米が敵同士になると，キリスト教は敵国宗教とされ，西洋宣教師は出国させられ，沢山の聖職者がスパイ容疑をかけられた。たとえば高雄の許水露牧師は毎日早朝に教会の塔に上って聖書を読んで祈る習慣であったが，それが海上の英米船との通信のためであって英米のスパイなのではないかとの容疑をかけられ，警察から注意を受けた末に逮捕されてしまった。本当に不当な仕打ちであった。

私は日本人子弟のために設立された小学校に通っており，沢山の日本人同級生がいた。ある時に新店教会の日曜学校に彼らを連れて行った。当時は日曜学校でもほとんど日本語を使用するようになっており，語学上の障壁もなかったので，日本人の同級

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

生は楽しそうに日曜学校などの活動に参加し、教会の牧師や先生たちも彼らが来たことをとても喜び、一緒に楽しく過ごしていた。神学校から夏期実習で派遣されて来ている神学生も日本人同級生と良い感情をもって交わっていた。

ところがある日曜日の朝、いつも参加していた日曜学校の日本人子弟が突然、神学生だった張逢昌〔後の大稻埕教會牧師〕に向かって「天皇陛下が偉いか？それともイエスが偉いか？」と聞いたのである。張先生は何も疑わずに「もちろんイエスさまの方が偉いよ。イエスさまは神の子だから」とすぐに答えた。実は日本人の思想教育に基づいて「天皇の神聖を侵すべからず、比べるとは何事だ！」と応えていれば、面倒なことにはならなかったのだ。

果たしてその日の午後、警察が張神学生を捕まえに教会に来て、彼の部屋を捜索し、さらに神学校宿舍の書棚にある本やノートを一頁一頁めくって入念に調べた。牧師、長老、教会学校の先生たちはみな非常に驚き、何が起こったのかわからず、後から間接的に原因を聞いてもどうしたら良いかわからず、警察の捜査に対しても、開けられた箱や倒された棚をそのままにして驚いているばかりだった。

.....

教会内の人たちは敢えて警察に訴えようとはせず、万能の主である神により頼む以外には何も良い解決策はないと考え、祈祷会を開き、信徒らに在宅の断食祈祷を呼びかけ、神が神学生を守って下さり、平安のうちに戻って来ることができるように、心を合わせて祈っていた。一週間近く経って神学生が釈放されたとき、一同は非常に感謝したが公の感謝集会を取って開くことはせず、ただ一つの教訓を学んだのである。それは、専制体制下では信仰問題には注意し慎重にならなければならないということであった。

③ 駱先春「難忘的三峡」(『三峡教會 [100 週年紀念冊]』1981 年, 15-20 頁) より
突然の来客 [1937 年]4 月 16 日午後、台北州特務の百井萬二が私を自宅に訪ねて来て、書棚の上にある本が皆英文書であるのを見て「君の本は皆横文字かね？」と不機嫌そうに言った。私は「そうです。この本は皆キリスト教の文献で、神学を研究するためのものです！」と答えた。彼は内心疑っている様子で、大戦勃発前の四～五年、毎年二、三回訪ねてきた。六男の維明が満一才になった頃、百井氏はまたやって来て、礼拝堂の外側で、私と私が抱いていた維明とを写真に撮っていった。

.....

何ゆえに？ 1941 年 12 月 8 日戦争が勃発し、筆者と陳文贊長老は板橋郡役所に 66 日間軟禁され、1942 年 2 月 11 日に釈放された。その間 2 月 2 日に理髮、2 月 11 日に食事代 168 元を支払い、その後釈放された。軟禁されていた時に持ち込んだ本も一緒に返却された。軟禁期間中の両家の妻子の悲しみや焦りは、本人でなければ形容できない。神は愛である。軟禁中に神は道を拓き、両家の妻子が私たちに面会しに来たり、

聖書を読む許可を与えられた。看守は交替制で、キリスト教をあざ笑う冷たい者もいれば、他の囚人たちに伝道することを許してくれる者もいた。時には筆者を廊下に出してくれ、弁当を分けてくれることもあった。確かに自由ではなかったが心に恥じることは何もなく、心の中は喜びに溢れていた・・・・・・・・・・

戦争中 戦争中は三峽でも有木でも定期集会を休むことはなかった。私たちは一家12名を養う生活を維持するために、有木の信徒宅に疎開した。有木の信徒たちは大小問わず皆非常によく私たちの面倒を見てくれた。サツマイモ、落花生を植えるのを助けるのみならず、収穫して三峽まで運び、表現できないような微妙な愛の心でもって一家が生活していけるようにしてくれた。・・・山間部の有木では昭和草を食べていたら筆者の顔がむくんでしまった。それを見て愛のある信者がときどき兎肉を贈ってくれた。彼らが三峽の集会に来てくれる時には、私たちは限りある配給米に大量の水を入れ、粥を作って私たち一家と内山の信徒皆が大鍋の上で船を漕ぐ方式で米をすくって食べる方法で飢えをしのいだ。俗にいう「一粒の田螺で九杯のスープ」[極端に物資が不足している、の意]の生活であった。

④ 陳芳本牧師・謝路得牧師夫人「苑裡教會牧會二十六年」(『苑裡教會 70 週年紀念特刊, 1982 年, 31-33 頁) より

1941 第二次年世界大戦勃発後、日本政府は皇民化運動を推進し、全島民に神道を信じるよう迫った。キリスト教伝道の統制に加え、戦況が悪くなると各種の物資が欠乏、米空軍による爆撃を受け、青年が軍夫として応召され、中学生以上の男女学生は労働を義務づけられ、主食や日用品がすべて配給制度となり、夜間は灯火管制が実施され、日曜日午前の礼拝以外の集会はすべて自由でなくなった。一方で、政府は戦争用の金・銅・鉄をすべて供出するように強制し、当時教会の木造牧師館で使っていた窓用の鉄条網をことごとく抜き取って供出した。しかし教会唯一の小さな鐘は私が急いで隠して現在まで保管している。この小さな鐘はもともと猫孟教会時代から受け継いできたもので、日曜学校の開始時間と午前の成人礼拝の前に私が鳴らして開始を告げたのであった。私は真の平和が一日も早く来て、その時にはこの鐘を再び鳴らして世の人々を警醒するようになることを期待したのであった。

⑤ 吳徳元「駐在烏日教會回憶録」(『烏日教會 75 週年紀念特刊』1985 年, 37 頁) より

1944 年 3 月 21 日、当時烏日教会は台中柳原教会の支会であったが、日本政府の命令により疎開し、私が台中柳原教会副牧師として烏日教会に赴任してから三年が経過していた。

当時の烏日教会はわずか五家族しか会員がなく、柳原が私の給与を毎月 30 円ちょうど負担し、烏日は毎月 15 円ちょうどを支給し、合計 45 円であった(当時私は 29-30 歳であった)が、生活は非常に苦しかった。

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

最初の一年半の生活では常に防空壕の改造を行い、1944年10月私の父母弟妹が高雄市の旗津より烏日教会に疎開して来た。1945年2月8日には義理の母、大きな甥っ子、二番目の甥っ子と、さらに29名が一度に屏東から烏日教会に疎開してきた。

当時の烏日教会宿舎は三つの寝室のみで実に混み合っていたが、我々の家族には適していた。

最も印象深かったのは、1945年2月11日、米軍による空襲が烏日駅の爆弾を積んだ軍用列車を爆撃し、機関砲撃中最後の車両が爆弾に命中して炸裂、その音が烏日庄全体に響き渡って振動させたことである。その時わずか13歳だった温清杰君はお兄さんの温清賢兄弟と甥?から烏日に来て爆発の光景を見ていたが、負傷者や死亡者が烏日教会に担ぎ込まれて来た中に、片方の太ももが爆発によって吹き飛ばされた温清杰君がいたのである。鮮血が一直線に吹き出して止まらず、ついに夕暮れ時に貴重な一命が失われた。彼は温才長老の次男であった。

三年間烏日にいた間、執事は温才執事と陳生明執事の二名しかおらず、戦時中だったため日本が烏日教会を徴用して製糖工場の倉庫として使用した。そこで礼拝は宿舎の中の客間において行った。・・・

⑥ 王榮福「在草屯教會牧會二十五年的郭朝成牧師」(『草屯教會設教80週年紀念特刊』1980年、34-39頁)より

[郭朝成] 牧師が草屯教会に来て17年目60歳の時、教会小会に辞任を申し出たが通らなかった。当時世界大戦が激烈になって物資が大きく欠乏し、戦争の罪により人々は栄養失調に苦しんでいた。この時牧師の謝礼は毎月60円で一家八人の生活費を賄うのは困難であった。さらに夫人は胃病で身体が弱く、家事を負担することができなかったため娘の教育を犠牲にして家事の手伝いをさせなくてはならなかった。・・・

牧師が草屯教会に来て19年目62歳の時、・・・戦争のために国民学校教室が勤務所になって勉強するところがないので、礼拝堂を教室にして勉強していた。もしも空襲が来たら学生を解散して警防団が見張っていない静かなところで祈り聖書を読むのだった。この頃郭東榮(長男)が旧暦一月の元旦に結婚式を挙げるので牧師に臨席してほしいと手紙をよこして来た。米軍空襲もあって出席は危険であったが、長男の結婚式はどれほど重大であるかと考えて出席するために南投方面から鳳山に赴いた。

⑦ 王興武「牧會感言」(『水里教會設教50週年1925-1975』1975年、31-32頁)より

筆者は1944年4月初めに水里教会に赴任し、二年四月月そこにいた。1933年台南神学院を卒業後すぐに馬公教会に派遣された。当時、文化協会の林獻堂、蔡培火、侯全成先生各位に講演をお願いしたので、日本政府に目を付けられた。[留学先だった]東京から戻って来てからは更に注意されていた。これは戦時期には必然のことであった。福音宣教は英米宣教師から始まったので、日本の特務や警察は常に教会の活動に注意

を払い、いつも何か言いがかりをつけようとしていた。私は防衛団の警備班長として応召されたが、教会外の人々に伝道するのは非常に困難であると感じた。戦争末期日本軍は敗北し、米軍 B29 の来襲によって数十名が死んだ。人々はそれぞれに山の洞穴に逃げ込んでいったので、私は山を下って教会員と教会奉仕の様子を見に行った。ある時にはちょうど米軍による空襲に遭い、道を歩いていた二人の人と同じ道で米軍の掃射を受けた。これはまずいと思ってすぐ道路脇の溝に倒れ込むと米軍機は離れて行った。溝から這い出してみると、二人のうち一人は射たれ死んでおり、もう一人は重傷を負っていた。凄惨な光景であったが、神が私の命を守ってくれたのだ。

⑧ 王采蘋(謝再生牧師夫人)「感言」(『新港教會慶祝設教 90 週年紀念特刊』1984 年、9 頁)より

・ ・ ・ 40 余年前新港教会に奉職中の時期はちょうど第二次世界大戦と重なっており、台湾は日本の植民地であったので、日本政府は台湾人の生活をすべて配給制に改め、各家庭に日本の神棚と大麻を祀ることを要求した。

ある村民会議の際、ある信徒の家では神棚を設置していなかったので、警官に「なぜ神棚がないのか？」と聞かれた。その信徒は「私たちは神明を祀りません」と答えた。警官はそれで「教会の牧師は信徒に神棚を祀らないように教えている」と報告し、上司は牧師を問いただす為に人員を派遣して来た。ちょうどその時には会議に出席する為嘉義に赴いており不在で帰りは遅かった。ある長老がそのことを聞きつけ、非常に緊張して、牧師が戻って来たらどのように答えるべきかを相談した。牧師は「このことについては切に祈るしかない。神の導きを祈ろう。そして各家庭の神棚を速やかに設置し綺麗にするのだ」と答えた。

果たして牧師は質問に答える為に呼び出され、私たちは神の守りが牧師の上にあるように切なる祈りを捧げた。牧師も「もしも午後の三時までに戻らないようであれば中会に連絡してくれ」と話していた。

感謝なことに牧師は一時間ほどで戻り、このように話した。「非常に不思議なことに、尋問にあたった長官はとても遠慮がちで、牧師を見ると腰掛けるように言い、「あなたは信者に神棚を祀らないように教えているのですか？」と聞いて来た。牧師は「私の宿舎には神棚がありますよ！信徒に神棚を設置するなど教える必要はありません」と答えた。しかし長官はさらに「あなたの信徒は神棚を奉じないと言ったそうですが」と聞いて来た。牧師は「私の考えでは、通訳の人が神棚 Sin-pheng と神明 Sin-beng との違いがわからず混乱して訳したのではないかと思います」と答えた。長官はそれを聞いて納得したらしく、その日に通訳に当たった者を呼び出して聞いた。「村民会議の日、どのように通訳をしたのか(当時は日本語から台湾語に訳していた)」。警官は「カミダナをどう訳したのか？」と聞き、通訳者は「カミダナは神棚ですから、当然「神棚」と訳しました」と答えた。

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

そこで牧師は長官に言った。誤解が生じたのはここで、通訳は「神棚」と言ったが、それが「神明」に聞こえたのだ。「神明」とは佛および先祖以外の紅い台の上に載せて拜む偶像のことで、私たち信徒は「私たちは神明を信じません」と言っただけのことなのである。その長官は通訳に向かって「今後、『カミダナ』はそのまま『カミダナ』で良い、通訳は不要だ。そうしないと違う意味になってしまう」と言った。

このように何事もなく牧師を返してくれたが、この一件で私たちは、主が親しく臨んで下さるところでは決して見放されないということ、体験させられたのである。

⑨ 蘇銅鐘「近代史第一部(1936-1945)」(『太平洋境教会設教 110 年史』1985)より(287頁)

・・・しかし本教会は[日本当局の]圧力を恐れることなく、[従来通りの]礼拝方式を堅持した。礼拝中の国歌斉唱を拒否し、皇居遥拝を拒否した。同様に台湾語での説教を続け、日本人牧師が礼拝を司る時には台湾語の通訳を付けた。・・・

・・・戦争末期に同盟軍が大挙して爆撃を行い、市民の多くが疎開した。本教会の小会記録を見ると、1945年2月4日、11日に開かれた次は、1945年10月10日に再び開かれている。これは爆撃の為に信徒が皆疎開した為である。しかし本教会の実力を見てとれるのは、日本が1945年8月15日に投降してからわずか二ヶ月の間に本教会は正常に戻っているということである。・・・

⑩ 「沿革史」(『東門巴克禮紀念教會 90 春秋紀念特刊』1993)からの抜粋(71-73頁)

- ・1938年：5月より日本語使用の学生礼拝(長栄中学および女学校の学生が多く参加)と台湾語使用の一般礼拝を分けて行う。
- ・1940年：教会の各部門の活動が困難に。
- ・1942年：金銀鉄銅の抛出命令に従い銅鐘と鉄門を徴収される。東門区区长より区民大会を開く為に礼拝堂を使用することを要求されるが、長老執事は歓迎せず。政府当局によって天照大神の神棚を設置するように政府当局から求められ、断固として拒否。当局は教会学校の学生を神社に参拝させよと要求。南部大会議長だった楊牧師は数度憲兵隊に呼び出されたが、キリスト教信仰と教会を堅持する立場を貫く。
- ・1943-44年灯火管制が厳しくなり、週日の集会は停止。主日礼拝の参加者数は激減。台南市の公共の場所と学校は軍隊の進駐するところなり、当教会は中国東北から来た関東軍が進駐し、一切の集会が停止になった。1944.3.1 台南は第一回目の大空襲を受け、市民は大挙して疎開。食料が極端に欠乏し、マラリヤが流行し、民衆の生活は非常に苦しくなった。3月から空襲が毎日ようになり、4月からは轟音が響くほどになった。市内は廢墟と化し、学校や機関は田舎に疎開し、教会の集会の一切が停止した。
- ・1945年：10月台湾は光復し、市民が疎開地から戻り、当教会信徒も戻ってきた。辛い教会の建築物は戦火を逃れ、すべてが元通りになり、民衆は形容できないくらいに

喜んだ。日本人は引揚げ、国民党軍が来た。教会は一年くらい集会できなかった。

① 「教會史話 五：焚而不熾」（『佳里教會 105 週年紀念特刊』2004 年、29-32 頁）より
<戦乱期の教会>日本が大東亜戦争を發動して以降、台湾は次第に戦争の影響を受け、生活がどんどん苦しくなった。1942 年以降はさらにひどくなり、教会信徒も生活を切り詰め、教会の献金収入は激減し、牧師の生活費を供給することができなくなった。それでも陳〔瓊瑤〕牧師は一言も文句を言わず、力を尽くして主に仕えた。信徒を見捨てるのは忍ばなかったが一家を養う必要があった為、慣れない生命保険のセールスをやって生活を維持し、本当に陳牧師に対して教会はまったく不足していた。

<エホバエレ> 1944 年、戦争が日増しに緊張感を増し、日本当局の台湾統治も更に厳しくなり、台湾人に改姓名を迫り、キリスト教徒には神社参拝を強制した。ホーリネス教会はそれを拒否したので閉鎖を余儀なくされ、西港集会のホーリネス信徒は本教会の礼拝に参加するようになった。この時、日本人は更に強硬な手段を用いて本教会の礼拝堂の土地を抛出させようとした。というのもこの土地はちょうど十字路にあり、分局が向かいにあって、派出所にもってこいの場所だったからである。教会は何度も拒否したが日本人はさらに強硬な手段でもって牧師と長老執事を分局内に拘禁し、林天徳長老の回想によれば、彼が面会に行くと、日本人は教会の長老執事に対して署名をしなければ放免しないと警告、どうしようもない状況下長老執事はついに教会の土地を譲る文書に署名をした。一方で 1913 年に海連伯が献げていた土地に礼拝堂を移転する準備を整えたが、移転費用は合計 8,220 元 3 角 8 分で、日本人から得た地価保証金は 6,357 元 2 角 5 分にしかならなかった。それでも、主に感謝することに、主は「エホバエレ」の神であって、30 年も前から既に私たちの教会の為に良き礼拝堂の為の土地を備えていて下さったのである。

<燃えても燃え尽きない>戦争の影が全台湾を既に覆い尽くし、人民の生活は日ごとに困難になっていった。青年たちは応召を受けて南洋に兵士や軍夫として出征し、農作物は押収された。一切の民生用品は配給になり、米軍が台湾を攻撃するようになるとの伝聞が常に聞かれた。教会内部も影響を受けた。人心は恐惶として浮き立ち、教会の長老執事、信徒たちの間にも意見の不一致が見られ、集団で互いに責め合い、ある者は牧師まで引き合いに出して中会に告発した。……

1945 年、米軍による台湾空襲で教会の一部が焼け、牧師館は全焼した。その中にあった教会会議記録や歴史資料が炬のように燃えてしまい、本当に惜しいことをした。……

② 「愛英美事件」「信徒坐獄」「台湾光復」（『鳳山教會 100 週年特刊』1967 年、5-6 頁）より

愛英美事件 1938 年 5 月 10 日第二任牧師として洪萬成を招聘したころ、中日戦争から 1941 年 12 月 8 日の日本の英米に対する布告戦線へと発展していった。礼拝堂は日本軍

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

の占領するところとなり、暫定的に彭清泉長老宅で集会を継続した。1942年6月15日の夜、蔡裕牧師が東京から今井宗太郎および阿部牧師の二名の日本人牧師を講演のために連れて来た。招待された多数の教会外の人々も来聴した。その晩の講演者は今井宗太郎牧師、題名は「日本精神ニ立脚セル基督教」であった。その晩、誰かによって書かれた「愛英美」という三文字が教会の壁に貼ってあり、6月18日に日本憲兵伍長の福田等の発見するところとなり、事は取捨が難しくなった。牧師館は憲兵隊出張所となり、洪牧師は毎日憲兵を連れて信徒の家庭に行き、字を書かせて筆跡を確認しなくてはならず、毎日憲兵隊から尋問を受けた。一方、彭清泉長老および劉瑞桃長老はこの事件を調査する責任者となり、調査の経過や結果を憲兵隊に提出しなければならなかった。この事件が発生して四ヶ月前後が経過した同年10月13日になって、憲兵隊は教会にこの事件は解決したと伝えた。嫌疑者は郡役所の農業課職員であった。この愛英美事件の影響で洪牧師は精神と肉体を甚だしく消耗し、体調を崩して1944年鳳山を離れ故郷の芳苑に戻って療養することになった。

信徒坐獄 1944年伝道師の郭東榮の任期中、悪徒と憲兵の使い走りによってこのような誹謗とデマが流された。「米軍機は礼拜堂の十字架を見たら絶対に爆撃しない、[教会は]絶対に安全だと牧師や長老がのべ伝えている」、そして教会はそれゆえに主を信じるように人々を招いている、というのである。そのために郭先生、彭清泉長老、劉瑞桃長老、陳謹女史、葉阿春女史（岸溪嫂）、林愛女史（來成嫂）らが捕えられ、憲兵隊の尋問や脅しを受け、彼らは一泊二日の間獄中に入れられた。当時ある悪徒が來成嫂について「日本人が祀っているところの天照大神の神棚をゴミ箱に捨てている」と投書で密告したため、憲兵隊は來成嫂を尋問、あなたの牧師や長老がそのような教えたのだらう、と強制的に認めさせようとしたが來成嫂は否認、そのためひどく叩かれた上、両親指を縄でしばられ背中から吊るされるという刑罰を受けた。このような酷刑を受けて気絶して床に倒れるほどの苦痛を受けても嘘は答えず、教会の他の人々に害が及ぶよりは自分が罪を着せられることを願い、死を覚悟した。釈放される際、何人にもこのような刑罰を受けたことを言ってはならない、発覚した場合には死んでもらうと口止めされた。來成嫂は実に尊い模範信徒である。光復当初になって密告者は林雲だったことが発覚した。・・・

台湾光復 大東亞戦争中多数の信徒が辺鄙な田舎に疎開して生活し、教会は荒れ果てた状態になっていた。空襲が激烈になったとき、しばしば信徒宅で集会を行った。信徒らは精神的に打ちのめされ、物資は欠乏し、ただ主からの慰めを受けるばかりだった。・・・

資料3：参照した各個教会史誌一覧

出版時期 区分	出版年	題名	現在所属 する中会	番号*
日本統治期	1930	台南中會設置請願書(1930.3.4)	台南	08_00
	1936	台南中會議事錄(1)	台南	08_00
	1940	台南中會議事錄(白話字) 1930-1940	台南	08_00
	1942	台南中會議事錄(2)	台南	08_00
国民党 一党独裁 開始期 (戒嚴令期)	1953	宜蘭教會傳教70簡史(1883-1953)	七星	02_11
	1955	大稻埕教會設教80週年紀念特刊	台北	03_02
	1955	看西街教會獻堂禮典	台南	08_03
	1956	艋舺教會80週年紀念冊	台北	03_05
	1956	台中中會 台灣基督長老教會歷史(員林, 社頭, 赤水, 田中)	台中	05_00
反攻大陸 放棄期 (1958年~)	1957	新竹教會成立80週年紀念冊	新竹	04_06
	1961	六甲教會創立簡史	台南	08_11
	1965	「基督教在台宣教百週年紀念嘉中畫刊」嘉義中會大眾傳達部發行(1965)	嘉義	07_00
	1965	牛挑灣教會簡史(1885-1965)	嘉義	07_13
	1965	旗後教會設教100週年紀念冊	高雄	09_03
	1967	鳳山教會100週年特刊 1867-1967	壽山	10_03
	1969	南投教會設教60週年紀念	台中	05_09
	1969	田中教會設教50週年特刊(1919-1969)	彰化	06_09
	1969	田中教會設教50週年史典	彰化	06_09
	1969	朴子教會設教70周年	嘉義	07_12
	1969	佳里教會70週年紀念	台南	08_09
	1970	台中中會40週年紀念冊	台中	05_00
	1970	草屯教會設教70週年紀念手冊	台中	05_10
	1970	土庫教會慶祝設教80週年暨牧師館落成(1890-1970)	嘉義	07_05
	1970	左鎮教會設教百週年, 1970	台南	08_16
	1970	屏東設教100週年史典	屏東	11_01
	1971	關子嶺教會簡史 設教87週年紀念	嘉義	07_25
	1971	岡山教會60週年紀念特刊,1971	高雄	09_05
	1971	旗山基督長老教會設教60週年紀念, 1971	高雄	09_11
	外交孤立 (1971.20)~ 党外運動 成長期	1972	台東教會獻堂典禮紀念冊(1924-1972)	東部
1972		淡水教會設教100週年紀念冊(1872-1972)	台北	03_19
1972		台中民族路教會設教25週年紀念特刊	台中	05_
1972		大林教會40週年史略	嘉義	07_16
1972		民雄教會設教60週年特刊, 1972	嘉義	07_17
1972		楠梓教會100週年(1872-1972)	高雄	09_04
1973		牛眠教會設教100週年紀念刊	台中	05_18
1973		嘉義東門教會100年簡史	嘉義	07_15
1973		隆田教會沿革(1876-1973)	台南	08_07
1973		鹽埕教會創設50週年紀念(1923-1973)	高雄	09_02
1974		台東教會設教50週年紀念冊(1924-1974)	東部	01_00
1974		斗六基督長老教會設教90週年特刊	嘉義	07_01
1974		鹽水教會獻堂典禮紀念手冊	嘉義	07_28
1975		大稻埕教會100年史冊	台北	03_02

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

1975	水里教會設教50週年(1925-1975)	台中	05_13
1975	員林教會簡史, 1975	彰化	06_07
1975	學甲教會70週年紀念手冊	台南	08_10
1975	屏東中會10週年紀念集(1965-1975)	屏東	11_00
1976	台灣基督長老教會宣教100年紀念特刊	台灣	00_
1976	陳溪圳牧師牧養雙連教會55週年感恩禮拜	七星	02_01
1976	艋舺教會設教100週年紀念特刊	台北	03_05
1977	東台設教100週年紀念特刊(1877-1977)	東部	01_00
1977	富里教會 設教100週年紀念特刊(1877-1977)	東部	01_09
1977	和平教會設教30週年紀念冊(1947-1977)	台北	03_
1978	三角埔教會百年史 慶祝設教100週年紀念特刊	台北	03_04
1979	金包里教會100年特刊(1979.4.1)	七星	02_07
1980	松山教會設教105週年暨禮拜堂重建獻堂紀念冊	七星	02_02
1980	草屯教會設教80週年紀念手冊	台中	05_10
1980	『成立50週年紀念特刊』嘉義中會(1980)	嘉義	07_00
1981	七星中會成立30年紀念特刊	七星	02_00
1981	台北中會成立30年紀念冊(1952-1981)	台北	03_00
1981	三峽教會100週年	台北	03_16
1981	士林教會獨立30週年紀念特刊	台北	03_18
1981	大社教會設教110週年紀念手冊(1871-1981)	台中	05_03
1981	彰化基督教醫院創設85週年	彰化	06_
1981	善化教會85周年紀念特刊	台南	08_12
1982	台灣女宣60年史(1922-1982)	女宣	00_
1982	宜蘭教會設教100週年紀念教會特刊	七星	02_11
1982	苑里長老教會設教70週年紀念特刊(1912-1982)	新竹	04_15
1982	大肚教會設立80週年感恩禮拜	台中	05_07
1982	原斗教會100週年特刊,	彰化	06_13
1983	雙連教會設教70週年紀念特刊(1913-1983)	七星	02_01
1983	和美教會設教80週年(1903-1983)	彰化	06_04
1983	鹽埕教會創設60週年紀念特刊	高雄	09_02
1984	汐止教會設教100週年特刊(1884-1984)	七星	02_04
1984	基隆教會獻堂紀念特刊(1984.1.15)	七星	02_05
1984	樂山五十：樂山療養院創立50週年紀念冊(1934-1984)	台北	03_
1984	芳苑教會85週年紀念特刊(1899-1984)	彰化	06_16
1984	新港台灣基督長老教會慶祝設教90週年紀念特刊, 1984	嘉義	07_09
1985	李春生紀念基督長老教會設教50週年紀念冊(1935-1985)	台北	03_01
1985	雙園教會設立50週年紀念特刊(1935-1985)	台北	03_06
1985	桃園教會(龜山)設教100週年紀念特刊(1885-1985)	新竹	04_03
1985	烏日教會75週年紀念特刊	台中	05_05
1985	太平境教會設教110年史	台南	08_01
1986	艋舺教會110週年	台北	03_05
1986	彰化教會100週年紀念	彰化	06_01
1986	歸仁教會設教88週年暨重建聖殿獻堂手冊, 1986	台南	08_21
1987	花蓮港教會設教80週年紀念特刊(1907-1987)	東部	01_04
1987	雙溪教會100週年紀念特刊	七星	02_10
1987	樹林教會60週年紀念(1927-1987)	台北	03_17

戒嚴令 解除～ 民主化以前	1987	隆田教會設教111週年紀念特刊(1876-1987)	台南	08_07
	1988	三角埔教會 設教110週年紀念特刊	台北	03_04
	1988	新竹中會設立50禧年紀念特刊(1938-1988)	新竹	04_00
	1988	新竹教會成立110週年紀念冊	新竹	04_06
	1988	溪湖教會設教90週年	彰化	06_05
	1988	白河教會設教100週年暨獻堂典禮紀念特刊	嘉義	07_22
	1989	墩仔腳教會設教80週年紀念特刊	新竹	04_19
	1990	關山教會60週年紀念特刊(1930-1990)	東部	01_02
	1990	三重埔教會設教50週年紀念特刊(1940-1990)	台北	03_09
	1990	南崁教會101週年紀念特刊	新竹	04_05
	1990	苗栗教會100週年紀念特刊(1890-1990)	新竹	04_16
	1990	台中中會60禧年紀念特刊	台中	05_00
	1990	高雄中會成立60週年紀念特刊, 1930-1990	高雄	09_00
	1991	柳原教會設教85週年紀念特刊	台中	05_01
	1991	大社教會設教120週年年史	台中	05_03
	1991	岡山教會設教80週年	高雄	09_05
	1992	板橋教會設教100週年紀念特刊	台北	03_15
	1992	淡水教會設教120週年紀念冊(1872-1992)	台北	03_19
	1992	東勢教會設教66週年暨獻堂紀念特刊	新竹	04_20
	1993	雙連教會設教80週年紀念特刊(1913-1983)	七星	02_01
	1993	大里教會94週年	台中	05_04
	1993	東門巴克禮紀念教會90春秋紀念特刊	台南	08_02
	1994	新店教會設教120週年紀念特刊(1874-1994)	台北	03_08
	1994	鯉魚潭(內社)教會未麗娟, 林鴻祐教師封牧暨就任授職	新竹	04_18
	1995	大稻埕教會120週年特刊(1875-1995)	台北	03_02
1995	雙園教會設立60週年紀念特刊	台北	03_06	
1995	水里教會創會70週年紀念專刊	台中	05_13	
民主化期	1996	中壢教會110週年	新竹	04_01
	1996	桃園教會110週年紀念特刊	新竹	04_03
	1996	柳原教會設教90週年紀念特刊	台中	05_01
	1996	彰化教會110週年紀念感恩禮拜	彰化	06_01
	1996	萬丹教會設教100週年紀念特刊	屏東	11_06
	1997	艋舺教會設教120週年紀念特刊	台北	03_05
	1997	新莊教會設教120週年紀念特刊	台北	03_10
	1997	板橋教會設教105週年紀念特刊	台北	03_15
	1997	樹林教會70週年紀念(1927-1997)	台北	03_17
	1997	鯉魚潭(內社)教會設教126週年紀念特刊	新竹	04_18
	1997	東港教會慶祝宣教130週年紀念特刊	屏東	11_10
	1998	東部設教120週年紀念文集	東部	01_00
	1998	蘇澳教會設教80週年紀念特刊(1918-1998)	七星	02_17
	1998	三角埔教會 設教120週年紀念特刊	台北	03_04
	1998	三峽教會120週年	台北	03_16
	1998	士林教會105週年暨建堂40週年紀念	台北	03_18
	1998	大溪教會獻堂感恩特刊	新竹	04_04
	1998	新竹教會成立120週年紀念冊	新竹	04_06
	1999	暖暖教會設教120週年特刊(1879-1999)	七星	02_06

各個教会史誌から見えてくる戦時期台湾のキリスト教徒

1999	金包里教會設教120年紀念特刊(1979-1999)	七星	02_07
1999	大甲教會90年特刊	新竹	04_21
1999	大里教會100週年	台中	05_04
1999	芳苑基督長老教會100週年慶(1899-1999)	彰化	06_16
1999	朴子教會設教100週年紀念特刊	嘉義	07_12
1999	太平境教會主日學120週年	台南	08_01
2000	礁溪教會設教80週年紀念特刊(1920-2000)	七星	02_13
2000	文山教會設教110週年紀念特刊	台北	03_07
2000	烏日教會90週年紀念專輯	台中	05_05
2000	草屯教會設教100週年紀念特刊	台中	05_10
2000	員林教會100周年	彰化	06_07
2000	左鎮教會設130週年暨獻堂手冊	台南	08_16
2000	竹仔腳教會130週年紀念(1871-2000)	屏東	11_09
2001	艋舺教會設教125週年紀念特刊	台北	03_05
2001	五股教會設教128週年紀念特刊(1873-2001)	台北	03_13
2001	八里教會設教120週年紀念特刊(1873-2001)	台北	03_14
2001	南中教會誌(1930-2001)	台南	08_00
2001	南中教會誌左鎮教会の頁	台南	08_00
2001	岡山教會設教90週年紀念冊	高雄	09_05
2001	馬公教會設教115週年紀念特刊(1886-2001)	高雄	09_14
2002	鯉魚潭(內社)教會設教130週年紀念特刊	新竹	04_18
2003	雙連教會設教90週年紀念特刊(1913-1983)	七星	02_01
2004	利澤簡教會設教120週年紀念特刊	七星	02_16
2004	新港台灣基督長老教會慶祝設教110週年紀念特刊	嘉義	07_09
2004	佳里教會105週年紀念特刊	台南	08_09
2004	永康教會設教110週年紀念特刊(1894-2004)	台南	08_22
2005	三星教會設教110週年紀念特刊	七星	02_15
2005	雙園教會設立70週年紀念特刊	台北	03_06
2005	霧峰教會設教90週年紀念特刊	台中	05_06
2006	中壢教會120週年(証し集)	新竹	04_01
2006	桃園教會120週年紀念特刊	新竹	04_03
2007	花蓮港教會設教100週年紀念特刊	東部	01_04
2007	加蜜山教會130週年見證集(1877-2007)	東部	01_06
2007	東里教會設教100週年紀念特刊(1907-2007)	東部	01_08
2007	宜蘭教會設教120週年、愛育幼稚園50週年	七星	02_11
2007	新莊教會設教130週年紀念特刊	台北	03_10
2007	樹林教會80週年紀念(1927-1997)	台北	03_17
2008	三角埔教會設教130週年紀念特刊	台北	03_04
2008	三峽教會設教紀念專刊	台北	03_16
2009	南港教會135週年紀念特刊	七星	02_03
2009	南投教會設教100週年紀念	台中	05_09
2010	羅東教會設教105週年特刊	七星	02_14
2010	聖殿改建獻堂紀念冊	台北	03_08
2010	三重埔教會設教70週年紀念特刊	台北	03_09
2010	烏日教會100週年紀念特刊	台中	05_05
2011	關山教會設教80週年紀念特刊	東部	01_02

2011	大溪教會120週年特刊	新竹	04_04
2001	岡山教會設教100週年	高雄	09_05
2011	阿美族宣教80週年紀念特刊	原住民	12_
2012	板橋教會設教130週年紀念特刊	台北	03_15
2012	淡水教會設教140週年紀念冊	台北	03_19
2012	南崁教會設立120年紀念文集	新竹	04_05
2013	雙連教會設教100週年紀念特刊(1913-1983)	七星	02_01
2013	士林教會120週年暨建堂40週年紀念	台北	03_18
2014	新店教會設教140週年紀念特刊	台北	03_08
2014	八里教會設教140週年紀念特刊(1874-2014)	台北	03_14
2014	二林教會設立90週年紀念特刊	彰化	06_14
2014	阿美中會50週年	原住民	12_
2015	慶祝福音來台150週年 紀念文集	台北	03_19
2015	桃園教會130週年紀念特刊	新竹	04_03
19??	澎湖縣白沙鄉瓦硯教會獻堂紀念手冊	高雄	09_19

*この番号は、戦前に設立された台湾長老教会を現在の中会ごとに分類(左側の番号)した上で、台湾基督長老教会ウェブサイトに記載されている順に並べ付いたものである。

注

- (1) 本論文は台湾政府外交部が外国人研究者に提供する「台湾奨助金」を得て、筆者が2018年4月より7月までの間に行うことができた資料調査をもとに執筆したものである。台湾政府外交部よりこのような研究の機会をいただいたことを、ここに記して謝意を表したい。
- (2) この点については、高井ヘラー由紀「回想資料から見えてくる戦時中の台湾人キリスト教徒」『富坂キリスト教センター紀要』7, 2017年3月, 119-134頁, を参照。
- (3) 例えば『烽火歲月：台湾人的戦時経験』（國史館台湾文獻館, 2005年）はその類いである。また、2018年9月に開催された The 3rd World Congress of Taiwan Studies では「台湾人的戦争経験：跨國與比較的觀點（台湾人の戦争経験：越境・比較的观点から）」と題するパネルが行われたが、それも南洋における台湾人の俘虜收容所監視員や通訳員についての報告を中心とするものであった。ただし注目すべきは、東南アジアの華人と言語文化的ルーツを同じくする「台湾人」が「日本人」として戦争に動員されたという、これまで看過されていた台湾人の戦争経験の中の一側面が指摘されたことである。”Taiwan

in the Globalized World: The Relevance of Taiwan Studies to the Social Sciences and Humanities” (Program of the 3rd World Congress of Taiwan Studies, September 6-8, 2018. Academia Sinica, Taipei, Taiwan), pp111-118, 参照。

- (4) ただし近年では戦時中の米軍による台湾空襲の全貌を明らかにしようとする著作も見受けられる。張維斌『空襲福爾摩沙：二戦盟軍飛機攻撃台灣紀實』台北市：前衛出版社，2015年；甘記豪『米機襲來：二戦台灣空襲寫真集』台北市：前衛出版社，2015年，参照。
- (5) 台湾基督長老教会歴史委員会が2010年に発行した『台湾基督長老教会歴史教育手冊』（使徒出版社）では，歴史教育や歴史保存，さらには教会記念誌作成の方法や意義が100頁にわたって論じられており，このような努力を通して教会全体の歴史に対する意識が高まってきていると考えられる。
- (6) この教会数には原住民族教会は含まれていない。しかしキリスト教は戦前より実質的に原住民族の間に広まっていたので，資料1には参考までに幾つかの教会の沿革を含めている。また，戦前七星中会は台北中会に，彰化中会は台中中会に，壽山および屏東中会は高雄中会に含まれていた。